青年団・上演台本

『日本文学盛衰史』

原作　高橋源一郎

作　平田オリザ

凡例

☆ー同じ数の台詞をほぼ同時に言う。
★ー前の台詞に重なる。
／ーあとの台詞に断ち切られる。
○ー台詞の頭に、若干の間が入る。
・・・ー○より少し長い空白。
▲ーそでにはけながら言う。
△ーそでから出ながら言う。

場面の数字は、便宜上のものです。

実際の上演台本と異なる点があります。

一場　北村透谷の死

＊大きな畳敷きの部屋。
後方に廊下。
廊下を上手に行くと葬儀をしている部屋があり、
下手に行くと台所や玄関があるらしい。

畳敷きの部屋に、座布団が敷かれていく。
座布団の列は四列。
便宜上、上手からA、B、C、Dとし、一列ごとに手前から1，2，3，4，5とする。
上手前方の座布団はA－1。下手後方の座布団はD－5となる。

四つの場面は、いずれも通夜か葬儀のあとの宴席。
舞台の設定も共通だが、同じ場所ではない。

一八九四年（明治二七年）五月
北村透谷の通夜の晩

何もない畳敷きの部屋。座布団が下手奥に固めて積み上げられている。

上手から、オルガン演奏による賛美歌が、かすかに聞こえてくる。

開場五分後から、女中たちが、箱膳を持って舞台に現れ、それらを並べては消えていく。
女中たちは、口々に『オッペケペー』などを口ずさんでいる。

0・1・1
開場時間は二〇分。
開場五分後（開演十五分前）
女中A、箱膳を持って下手から登場。
とりあえず、A列手前から並べる。
下手に退場。

一分後、女中B、箱膳を持って下手から登場。
先の女中に習ってB列手前から並べる。
下手に退場。

一分後、女中C、箱膳を持って下手から登場。
先の女中に習ってC列手前から並べる。
下手に退場。

開場十分後（開演十分前）。
女中A、箱膳を持って下手から登場。
A列、B列に並べる。

そこに女中B、下手から箱膳を持って登場。
C，Dに適当に並べる。

女中A　これ、どうしますかね、
女中B　え？
女中A　並べるの？
女中B　そうねぇ、
女中A　全部は並べないでいいんですよね、
女中B　まぁ、あとは、人が来てからでいいでしょう。

女中Ａ　はい。

＊そこに、女中Ｃ、下手から箱膳を持って登場。
どこに箱膳を置くかためらう。

女中Ｃ　・・・

女中Ｂ　適当でいいんじゃない。

女中Ｃ　うん。

＊女中Ｃ、空いているスペースに箱膳を置く。

女中Ａ　これ、座布団も？

女中Ｂ　あぁ、そうか。

女中Ｃ　★とりあえず、お膳置いたとこだけ敷いておこうか。

女中Ａ　はい。

＊各自、お膳を置いたところに、座布団を配する。

開場十四分後（開演六分前）、上手より、田中登場。
しばらく宴席を見回して、Ｃ－１に座る。

開場十五分後（開演五分前）、下手より女中Ａ、箱膳を持って登場。Ａ列に置く。

女中Ａ　ご苦労様でございます。

田中　どうも、

女中Ａ　いま、お酒を、

田中　あ、いや、

＊女中Ａ、座布団を先ほど箱膳を置いた場所に配す。
下手に退場。

一分後、女中Ａ、お盆にお銚子を載せて、下手より登場。

女中Ａ　どうぞ（お銚子を田中の膳の上に置く）、

田中　あぁ、すいません。

＊女中Ａ、下手に退場。
二十秒後、場内アナウンス。

二十秒後、女中Ｂ、女中Ｃ、大きな急須を持って登場。急須を上手、下手にそれぞれ置いて退場。
開演定刻、上手より佐藤、登場。
Ｄ－３に座る。

佐藤　どうも、

田中　どうも、

・・・

田中　まぁ、どうぞ、いっぱい、

佐藤　あ、いえ、私は、

田中　ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、そう言わずに。

佐藤　すいません。

＊田中、酒をつぐ。

佐藤　ま、ま、田中さんも。

田中　すみません。

＊佐藤、酒をつぐ。
沈黙。

佐藤　やっぱり、文学の人っていうのはあれです
ねぇ、
田中　え？
佐藤　ちょっと、変わってるっていうか、雰囲気が。
田中　あぁ、まぁねぇ、
佐藤　ねぇ、

＊十秒後、女中Ｂ、下手から箱膳を持って登場。
適当に置く。

佐藤　すみません、お手伝いもできなくて、
女中Ｂ　いえいえ、そんな、とんでもない。

＊座布団も適当に配置して下手に退場。

開演、鈴木、上手から登場。Ｃ－３に座る。
１・１・１
客電、賛美歌、ゆっくりと消えていく。

田中　あぁ、どうも、
鈴木　どうも、
田中　・・・しかし、急でしたね、
鈴木　えぇ、まぁ、
佐藤　まぁ、でも、自殺に急も何もないでしょう。
田中　ま、そりゃそうなんだけど、
田中　ま、どうぞ、（酒をつぐ）
鈴木　あぁ、すみません。

佐藤　去年の暮れのときから、もう頭の方が、相当
あれだったんでしょう。
田中　それは、そうなんだけど、ただ体の方はずい
ぶん持ち直したって聞いてたんで、
鈴木　そうそう、
佐藤　でも、文章も、書いてらっしゃらなかったん
でしょう。
鈴木　まぁね。
田中　うん。
佐藤　あの、
鈴木　はい、
佐藤　あの、私、全然、わかんないんですけど、
鈴木　はい。
佐藤　人ってのは文学のために死ねますか？
田中　あぁ、
鈴木　うーん、
佐藤　ねぇ、っていうか、文学が書けなくなって気
が触れますか？
田中　まぁ、どうでしょう。
佐藤　おかしいでしょう、そんなの、だって、
鈴木　まぁねぇ、
佐藤　聞いたことないし、そんなの、
鈴木　ま、ま、ま、ま、ま（お酒をつぐ）

＊上手から島崎藤村、登場。

田中　あ、あ、島崎さん。
島崎　どうも、本日は、
田中　あれ、知ってたっけ、知ってたっけ？
島崎　いえ、

田中　ご近所の佐藤さんと鈴木さん、
島崎　あ、それはどうも、
佐藤　★どうも、
鈴木　★どうも、
田中　北村さんのお弟子さんの、島崎さん、
鈴木　あぁ、
島崎　いや、弟子ではないですよ。
田中　あ、そう、なに、じゃあ？
島崎　まぁ、同志というか、弟のようなもんです。
田中　あぁ、
佐藤　島崎さんも、文学を？
島崎　はい、まぁ、
佐藤　あぁ、
島崎　なにか？
佐藤　いや、いまちょっと話してたんですけど、
島崎　え？
鈴木　ま、ま、佐藤さん。
佐藤　え、え、ダメなの？
田中　島崎さん、奥様は、北村さんの、
島崎　まだ、奥で、
田中　そうか、
島崎　今日は、ちょっと、偉い方たちもお見えになってますから。
田中　あぁ、そう。
佐藤　あの島崎さん、
島崎　はい。
佐藤　じゃ、じゃ、内面ってのは、なんですか？
島崎　え？
佐藤　なんだか、北村さんが、最後に会ったとき内面、内面って言ってたんですけどね
島崎　あぁ、

＊上手から長谷川辰之助（二葉亭四迷）登場。
静かに、Ａ－４に静かに座る。
１・１・２

佐藤　なんですか、それ？
島崎　まぁ、心と言ってもいいのですが、
佐藤　えぇ、
島崎　すみません。ちょっと失礼。
佐藤　え、え？

＊島崎、長谷川のところに向かう。

佐藤　・・・だったら、心っていやぁいいじゃんねぇ。
田中　☆まぁ、そういうもんでもないんだろう。
佐藤　なに？
島崎　☆長谷川先生、どうも、今日はわざわざ、
長谷川　いえ、すぐにおいとまするつもりだったのだけど、
島崎　いや、
長谷川　坪内先生が、あとからいらっしゃると聞いたんで、
島崎　え、坪内先生も
長谷川　えぇ、
島崎　あれ、森先生は？
長谷川　森さんは、何か奥さんと話をされていたようです。

島崎　あぁ、
長谷川　はい。
島崎　こんなにたくさんの方に集まっていただけるとは、北村も喜んでいると思います。
長谷川　北村君のことは、気にかかっていたのですが、お目にかかることができなくて、
島崎　北村も、先生の『浮雲』には、とても影響を受けておりました。
長谷川　そんなことはないでしょう。
島崎　いえ、本当です。
長谷川　いや、あれはダメです。
島崎　〇そんな、
長谷川　あ、いや、
島崎　☆☆え？
長谷川　すみません。
・・・
島崎　あ、すみません。気がつかずに。
長谷川　え？
島崎　（断って廊下に出て下手に）すみません。酒を、
女中Ａ　はーい。
長谷川　いや、僕は、
島崎　（お膳を動かして）☆☆☆どうぞ、
長谷川　ありがとう。
佐藤　☆☆だれ？
鈴木　二葉亭四迷だ。
佐藤　え？
鈴木　二葉亭、
佐藤　噺家さん？
鈴木　違うよ。
佐藤　なんだ、
鈴木　あんな噺家いないだろう。
佐藤　だって、
長谷川　どうも、僕は、北村君のようにはなれなくて、
島崎　・・・やはり、文学は男子一生の仕事ではありませんか？
長谷川　そりゃそうだろう。
島崎　☆☆☆しかし、先生は、
長谷川　島崎君は、詩を書くんでしたよね、
島崎　はい。
長谷川　詩ならまだいいかもしれない。
島崎　え？
長谷川　小説はどうもダメです。
島崎　・・・
長谷川　書きたいと思うこともない。

＊女中Ａ、お銚子を持って下手から登場。

女中Ａ　お待たせしました。
島崎　すみません。
女中Ａ　どうぞ、
島崎　あとは、私が、
女中Ａ　はい。

＊女中Ａ、部屋を見回してから下手に退場。
１・１・３

長谷川　（島崎に酒をつがれて）ありがとう。

島崎　・・・
長谷川　北村君に、会っておけばよかった。
島崎　え？
長谷川　どうも、私は、北村君に会うことを避けてしまっていたようです。
島崎　あ、いや、
長谷川　どうぞ、あちらのお仲間の方に、
島崎　いえ、あちらは、北村の古くからのお知り合いで、
長谷川　あぁ、
島崎　はい。
鈴木　だいじょうぶでーす。
長谷川　僕は、一人で飲んでいますから、
島崎　・・・はぁ、
長谷川　一人にしてもらった方が、
島崎　☆☆はぁ、

＊島崎、所在なげに長谷川の元を離れる。

鈴木　☆☆☆あれ、どうも、心中っていうのは西洋にはないらしいですね。
田中　え、そうなの？
鈴木　なんか、そう聞きましたけど。
田中　え、どうしてだろう？
佐藤　うん。
田中　どうしてかな？
佐藤　☆え、え、でも『ロメオとジュリエット』は？
田中　あぁ、そうか。
鈴木　あぁ、
佐藤　でしょ、
鈴木　いや、でもあれは、勘違いで後を追ったって話なんでしょ、よく知らないけど。
佐藤　まぁ、そうか。
田中　☆☆あれあれ、そういえば鈴木さん、北村と横浜でハムレット観たんでしょ、居留地で？
鈴木　観た観た。
田中　あれからでしょ、北村が急に、ドラマ、ドラマって言い出したのは、
鈴木　いや、違うよ。『蓬莱曲』は、その前に書いてるからね。
田中　え、そう？
鈴木　だよね？
島崎　はい、そうだと思います。
田中　そうか。
島崎　『蓬莱曲』を書き上げて、何日かあとに『ハムレット』を見たので、相当ショックは受けてましたね。
田中　あ、そう。
島崎　はい。
田中　やっぱり、そんなにすごかったの？
鈴木　いや、英語だから、俺は、よく分からなかったんだけど、
田中　なんだよ。
鈴木　しょうがないよ、だって、
佐藤　私、去年ハムレット観たよ、
田中　え、どこで？
佐藤　芸劇、池袋、
田中　あぁ、

田中　え、え、誰がハムレット？
佐藤　内野さん、
田中　オフィーリアは？
佐藤　貫地谷なんとかって人、
田中　よかった？
佐藤　うん、まぁまぁ、
田中　へー、
佐藤　なんか、外人の演出家さんだった。
鈴木　あ、そういえば、俺、女房とも観たな、三年前くらい。
田中　なんだよ、
鈴木　いやいや、忘れてた。
田中　どこで？
鈴木　埼芸。
田中　あぁ、蜷川さんのだ。
鈴木　そうそう、亡くなる前の年かな。
田中　そうか。
佐藤　え、じゃあ、ハムレットは？
鈴木　藤原竜也、
佐藤・田中　あぁ、
・・・
鈴木　え、え、聞けよ、
田中　なに？
鈴木　よかった？とか、
田中　あぁ、
鈴木　うん。
田中　・・・よかった？
鈴木　満島ひかりはよかった。
佐藤・田中　あぁ、
・・・
鈴木　あとあと、俺、変だと思ったんだけど、
田中　なに？
鈴木　それが、蜷川幸雄八十周年公演ってなってたのね。
田中　はぁ？
鈴木　八十周年って変じゃない、生きてる人に。
田中　まぁね、
佐藤　そうか？
鈴木　だって開館八十周年とかでしょ、そういうの、
佐藤　え、でも、生誕八十周年とか言わない？
鈴木　だから、それ死んだ人とかじゃないの、普通。
佐藤　あぁ、そうか。
鈴木　でしょう。
田中　どうですか、島崎さん？
島崎　え？
田中　変ですか、八十周年は？
島崎　まぁ、少し、
鈴木　ほらぁ、
佐藤　デビュー二十周年とかはあるよね。
田中　あ、あ、今年和田アキ子、デビュー五十周年だって、
佐藤　へー、
鈴木　詳しいね、
田中　☆なんか、こないだテレビで観た。
佐藤　♪忘れられないのー、
鈴木　それピンキーだろう。
佐藤　あ、あ、そうか・・・え、じゃあ、和田アキ子は？
鈴木　♪笑って許して、
佐藤・田中　あぁ、

島崎　☆長谷川さんは、蓬莱曲はお読みになりましたか？
長谷川　えぇ、もちろん。
島崎　いかがでしたか？
長谷川　・・・亡くなられた方の話は難しいです
が・・・あれは北村君が書きたかったものとは違うような気がします。
島崎　えぇ・・・ドラマはどうでしょうか？
長谷川　え？
島崎　小説がダメなら、ドラマは？
長谷川　ドラマはもっと難しいでしょう。
島崎　そうですか？
長谷川　人間は、北村君が言うところの内面を、そう口には出さないでしょう。
島崎　それは、そうですが。
長谷川　坪内先生にも混乱がある。
島崎　☆☆え？
長谷川　ハムレットが怯えているのは亡霊だ。恋に悩んでいるわけではない。
島崎　そうですか？
長谷川　ロシアに、チェーハフという作家がいるそうです。
島崎　はぁ？
長谷川　聞いたことは？
島崎　いえ、
長谷川　私も、短編の小説を一つ読んだだけなんだけど、そのチェーハフのドラマは、すこぶる変わっているそうです。
島崎　☆☆☆はぁ、

長谷川　これまでは短いドラマだけだったが、いま、長いものを書いているらしい。
島崎　どう変なんですか？
長谷川　あまり、筋というものがないようです。
島崎　え？
長谷川　セークスピアのような美しい台詞もない。
島崎　はぁ、え、じゃあ？
長谷川　ただ人が出てきて、ダラダラとしゃべる。英雄豪傑も出てこない。何かが解決されるわけでもない。恋が成就するわけでもない。
島崎　それは、
長谷川　しかし、存外、そこに北村君が書きたかったものがあるかもしれない。
島崎　そうでしょうか？
長谷川　分からない。早く読みたいと思うけど。
島崎　☆はい
佐藤　☆先生、そのドラーマは、なんていう？
長谷川　え？
佐藤　その、題名は？
長谷川　あぁ、たしか、「かもめ」というそうです。
佐藤　はぁ、
鈴木　鳥の話ですか？
長谷川　どうでしょう。
田中　まぁ、そうだろう。かもめなんだから。
佐藤　うん。
長谷川　まぁ、そうでしょうね。
佐藤　はい。
鈴木　☆☆あんた、大きい女ってカテゴリーだけで覚えてただろう。

佐藤　あぁ、まぁね。

田中　☆☆☆変な名前。

鈴木　ツルゲーネフ、

佐藤　ドストエフスキー、

田中　ロシア人、頭おかしいな。

＊上手から、星野、星良、大矢、続けて登場。

1・1・4

島崎　どうも、ご苦労様です。

星野　うん。

島崎　まぁ、どうぞ、

星野　うん。（長谷川の前に座って）本日はどうも、わざわざ、

長谷川　いや、お邪魔しております。

星野　北村の教え子の星君です。

長谷川　あぁ、

星良　はじめまして、

長谷川　長谷川です。

星良　☆星と申します。

星野　☆ま、ま、どうぞ、（酒をつぐ）

長谷川　ありがとう。

鈴木　北村は、もてたんでしょうね、女学校では、

星良　はい、まぁ。

鈴木　なんだか、ラブに落ちた人がいたんでしょう。

星良　いましたが、昨年、亡くなりました。

鈴木　あ、

星良　はい、残念ながら。

島崎　☆文學界の同人の星野さんです。

田中　あぁ、

島崎　大矢さんも、どうぞ、こちらに。

大矢　えぇ。

島崎　どうぞ、

大矢　じゃあ、少しだけ、失礼して、

島崎　はい。

大矢　（Ｄ－５に座る）

島崎　いや、そんな端ではなく、こちらに、

大矢　いや僕は、

島崎　でも、

大矢　ここで、

島崎　そうですか？

星良　大矢さんのお話は、北村先生からよく伺いました。

大矢　いや、

星良　北村先生、銀行強盗を断ったんでしょ、

大矢　あれは、申し訳ないことをしました。

星野　大矢さん、

大矢　はい。

星野　少し、お伺いしたいんですが？

大矢　何か？

星野　北村が死んだのは、やはり、民権運動の衰退と関係がありますか？

大矢　☆さぁ、どうでしょう。

星野　私は、北村が狂ったのは、いまの時勢と無関係ではないと思っています。

大矢　あぁ、

佐藤　☆☆ほらぁ、

鈴木　え、なに？

佐藤　だから、文学だけじゃ、人はおかしくならないでしょう。
鈴木　あぁ、
田中　まぁな。

＊下手から女中Ｂに連れられて、樋口一葉登場。
１・２・１

女中Ｂ　☆どうぞ、どうぞ、こちらに、
樋口　すみません。
女中Ｂ　どうぞ、まだ、皆さん奥ですから、
島崎　あぁ、樋口さん、
樋口　あ、島崎さん、
島崎　どうも、
樋口　すみません、遅くなって、
島崎　いや、まだ皆さん、奥で。
樋口　はい。
島崎　どうぞ、
樋口　失礼します。（女中Ｂに）ありがとうございます。
女中Ｂ　いえ、

＊樋口、上手に退場。
女中Ｂ、部屋を眺め回したあと、下手に退場。

長谷川　☆☆大矢さんというと大阪事件の、
大矢　えぇ、まぁ。
長谷川　金玉均が、死んだんですか？
大矢　はい。この三月に、上海で。
長谷川　はぁ、
大矢　明成皇后閔妃（びんひ）の差し金だと聞いています。
長谷川　はぁ、
大矢　明成皇后は支那寄り、ロシア寄りですからね。
長谷川　えぇ。
佐藤　やっぱり、戦争になりますかね？
大矢　朝鮮の王族が支那からの独立を望まない以上、日本政府としては、力で彼らの目を啓かせるのは、しかたのないことでしょう。
佐藤　☆はい。
大矢　しかし、このいくさは、あくまで朝鮮の民衆のためです。
佐藤　えぇ、
鈴木　でも、支那といくさして勝てますか？
長谷川　勝たなくちゃならんでしょう。
島崎　☆先生は、樋口さんは？
長谷川　あぁ、彼女が。
島崎　はい。不思議な人です。
長谷川　しかし、書くものはなかなか素晴らしい。
島崎　えぇ、
田中　え、え、いまの樋口一葉ですか？
島崎　はい。
田中　若いのね。
島崎　私と同じ明治五年ですから、二三か四でしょうね。
田中　あらー、
島崎　はい。
田中　みんな、若いわー。

＊森鴎外、上手から登場。
1・2・2

森　どうも、
島崎　あ、森先生。
森　失礼します。
長谷川　どうも、
島崎　どうぞ、こちらに。
森　失礼します（長谷川の隣に座る）
長谷川　奥様と何を？
森　いや、医者の癖で、最後の様子をどうしても、
長谷川　なるほど、
島崎　ありがとうございます。
森　夏目さんも、もう来るとのことです。
島崎　え、夏目先生も、
森　いま、ＬＩＮＥで、
島崎　あぁ、
森　正岡君を連れて、
島崎　本当ですか？
森　猫のスタンプが付いてましたよ。
長谷川　ほー、
森　どこでゲットしたんだろう。
鈴木　森先生、
森　はい。
鈴木　いま、支那といくさして勝てるかと話してたんですが。
森　あぁ、
鈴木　どうですか？
森　衰えたとはいえ、支那は大国です・・・厳しい戦になるでしょう。
鈴木　はい。
森　特に海軍は厳しいかもしれない。
鈴木　なるほど、
森　制海権を握られてしまえば、補給がたたれて朝鮮に渡った陸軍は干上がります。
鈴木　そんな、
森　まだ軍艦が足りないと海軍は言うんですが、
佐藤　なるほど、
森　しかし、いまある軍艦で闘うか、あるいは、それでは闘わないかというのが戦争というものです。
佐藤　おぉ、

＊北村ミナ、上手から登場。続いて田山花袋も登場。
1・2・3

島崎　あ、ミナさん、
ミナ　どうも、
・・・
ミナ　本日は、皆様、ご多用にもかかわらず、亡き夫、透谷北村門太郎のために、通夜にご参列くださいまして誠にありがとうございます。特に、森鴎外先生、二葉亭四迷先生、主人が生前より尊敬申し上げていた先生方においでいただきましたこと、亡き主人にかわり御礼申し上げます。ささやかではございますが、どうぞ、主人も酒はたいそう好きだったものですから、どうぞ、召しあがりながら、北村の思い出話などを、お聞かせいただければと思います。

今日は本当にありがとうございました。
（下手に向かって）あの、お酒を、もっと、
女中C　（袖から）はーい。
ミナ　（長谷川と森の前に座って酒をつぐ）どうぞ、
森　すみません。
ミナ　どうぞ、
長谷川　☆すみません。
島崎　☆田山君、中に。
田山　いえ、おれは、いいよ。
島崎　なに、遠慮してんだよ、
田山　いや、だって、いいって、
長谷川　先ほども島崎君と話していたんですが、これは、あの、北村君が、これほどに苦しんでいるとは知らずに、申し訳ないことをしました。
ミナ　いえ、
長谷川　どうしても私のような者には、そこまで突き詰めて文学を考えることができないものですから。
ミナ　そんな、とんでもない。
森　長谷川さんにそう言われてしまっては、私なんぞは、ますます肩身が狭くなりますから、
ミナ　★そんな、森先生まで。
＊女中A、B、C、上手から酒を運んでくる。
そのあとも膳を運んだり、空いたお銚子を片付けたりする。
1・2・4

女中A・B・C　お待たせしました。
島崎　ありがとう。
佐藤　すいませんね。
鈴木　すみません。
島崎　森先生、こちら、田山君と言って、
森　あぁ、
島崎　いまは硯友社にいるんですが、どうも本当は、森先生のことを大変尊敬しているらしくて、
森　いや、そんな、
田山　本当です。
森　まあ、じゃあ、どうぞ、こっちに、
田山　いえ、
島崎　いいから、せっかくだから、
ミナ　どうぞどうぞ、北村は、若い方たちと、みんなで文学の話をするのが、もう何より好きでしたから、
田山　はぁ、
星野　そうだ、そうだ、
星　はい。
森　いらっしゃい。
田山　では、失礼します。
＊田山、森の向かいに座る。
森　尾崎さんはたしか、北村君と同い年くらいでしたっけ？
田山　はい。
ミナ　★えぇ、うちは明治になってからですけど、
田山　尾崎先生は慶応三年、ご一新のさなかの生まれと聞いています。

森　なるほど、
長谷川　ご活躍ですね。
田山　はい。
森　すばらしい。
長谷川　いや、しかし、硯友社では、本当の文学はできないと私は考えています。
長谷川　そう？
田山　はい。
森　いいんじゃないの、売れれば、
田山　いや、
ミナ　ごめんなさいね、北村が悪口ばっかり書いてしまって、
田山　いえ、私は、北村先生のお書きになっていることにこそ、まことの真実があると思っていました。
ミナ　そんな、（さけをつぐ）ま、ま、
田山　すみません。・・・尾崎先生のお書きになるのはたしかにラブ、純愛ではない、ただの欲情です。
長谷川　しかし文学で食べていこうと思ったら、紅葉、露伴のようじゃなくっちゃね。
森　あぁ。
田山　いや、そんなことは、
森　ま、ま、ま、ま、
田山　ありがとうございます。
鈴木　☆ねぇねぇ、さっきさ、歌ってた唄、歌ってよ。
女中C　え？
鈴木　ほら、さっきの、一かけ、二かけ、
女中C　あぁ、
鈴木　なにあれ？
佐藤　え、知らないの？
鈴木　うん。
佐藤　みんな、やってるわよね、子どもたち、
鈴木　なんか、聞いたことあるんだけど、
佐藤　うん。
鈴木　うち、子どもがいないからさ、
佐藤　あぁ、そうか。
鈴木　うん。
佐藤　一かけ　二かけて　三かけて
女中C　（一緒に）四かけて　五かけて　橋をかけ
橋の欄干　手を腰に
はるか彼方を　眺むれば
十七八の　姉さんが
花と線香を　手に持って
もしもし姉さん　どこ行くの
私は九州　鹿児島の
西郷隆盛　娘です
明治１０年３月３日　切腹なされた父上様の
お墓参りに参ります
お墓の前では手を合わせ
南無阿弥陀仏（ナンマイダブツ）と拝みます
もし私が男なら、父の仇を討ったのに
ジャンケンポン！
・・・
女中C　すみません。
佐藤　すみません。
森　いやいやいや、
長谷川　けっこうけっこう、

田中　せごどんって言うんでしょ？
佐藤　なに？
田中　せごどんって言うんじゃないの？
佐藤　あぁ、西郷さん、
田中　せごどんって言うんですよね？
森　あぁ、今年はですね。
田中　はい。
長谷川　西郷さんは、「まだまだ戦さがたりもはん」と言ってたそうです。
島崎　え？
長谷川　司馬さんの本にそう書いてありました。
島崎　☆あぁ、
佐藤　「とぶが如く」だ
長谷川　まぁ、しかし、西郷さんの思ったとおりになりますね。
森　どうでしょうか？
長谷川　☆☆たしかに、まだ、この国は、いくさが足りないのかもしれません。

ミナ　☆（下手に向かって）あの、お酒を、もっと、
女中C　（袖から）はーい。
ミナ　☆☆星さん、今日は、他の皆さんは、
星良　学校が忙しくて、
ミナ　先日はすみませんでした。
星良　いえ、そんな、
ミナ　島崎さんは、よかったんですか、学校の方は？
島崎　えぇ、それは、もちろん。
ミナ　よかったわね、島崎さんに戻ってもらえて、
星良　あ、いえ、
ミナ　うちのなんかより、島崎さんの方がもっともてるんでしょ？
星良　いえ、それは、
島崎　やめてくださいよ。
佐藤　あぁ、聞いたな、その話。
島崎　だから、やめてくださいって、
佐藤　もう、ラブラブなんでしょ、
島崎　違いますよ。

＊下手から女中Aに連れられて夏目漱石、正岡子規登場。
1・3・1

女中A　どうぞ、どうぞ、こちらに、
夏目　ありがとう。
女中A　どうぞどうぞ、
正岡　はい。
星野　あ、夏目先生、
夏目　すいません、遅くなって、
星野　いや、わざわざ、これは、
ミナ　夏目先生でいらっしゃいますか？
夏目　はい。
ミナ　北村の家内のミナと申します。
夏目　あぁ、このたびは、誠にご愁傷様でございます。
ミナ　どうぞ、まだ、あちらにも何人か、
夏目　はい、じゃあ、
ミナ　えぇ、
夏目　あ、これが正岡君です。
一同　おぉ、

佐藤　え、え？
田中　☆子規、子規、
佐藤　はぁ、

正岡　☆こんにちは、
島崎　「日本」（にっぽん）の連載は、いつも読ませていただいています。
正岡　ありがとう。君は？
島崎　島崎と申します。
正岡　あぁ、文学界の、
島崎　はい。
星野　星野です。
正岡　あぁ・・・北村さん亡き後、大変でしょうけんど、頑張ってください、
星野・島崎　ありがとうございます。
夏目　頑張って、
島崎　僕たちは、夏目先生のホイットマン論について、徹夜で議論したことがあるんです。
夏目　いや、あれは、そんな。
島崎　本当です。
星野　☆えぇ、
島崎　夏目先生、
夏目　いや、その先生って言うのはやめてくださいね、そんなに年も違わないし。
星野　はぁ、

正岡　☆先生方も、これは、
森　どうも、
長谷川　どうも、
正岡　正岡です。
長谷川　長谷川です。
森　森です。
正岡　先生方も今度、うちの句会に、おいでくださいね。

森　☆あぁ、それは、是非。
長谷川　☆はい。
夏目　★正岡君、あとにしよう、
正岡　うん。
夏目　では、失礼して、
森　はい。
正岡　失礼します。
ミナ　どうぞ、どうぞ、こちらに、
正岡　すいません。
夏目　▲すいません。

＊ミナ、夏目、正岡、上手に退場。

１・３・２

森　夏目さんは、それこそ、小説はお書きにならないんですかね？
長谷川　あぁ、どうでしょう。
森　松山に転勤なんでしょ、
島崎　あぁ、らしいですね。
長谷川　★まぁ、あれだけの書く力と英語の力をお持ちですからね、少なくとも、翻訳は、ひとかどのものをしてくれるんじゃないですか。
森　えぇ、
長谷川　松山に行けば、何か松山を舞台にしたものを書いてくれるかもしれませんね。

森　道後湯けむり殺人事件とか、
一同　ははははは、

＊一人で飲んでいた大矢、森の前に座る。

大矢　森鴎外閣下でいらっしゃいますか？
森　はい。森です。
大矢　大矢と申します。
星野　自由民権の壮士ですよ。
森　あぁ、
大矢　いや、もう壮士というあれじゃないんだが、
森　では、北村さんの、
島崎　はい、古いご友人です。
大矢　閣下は、三浦梧楼中将をご存じですか？
森　えぇ、たしか、大山閣下とドイツにいらしたときに通訳を仰せつかりました。
大矢　三浦閣下に誘われて、朝鮮に行くことにしました。
星野　☆え？
森　☆はぁ、
大矢　金玉均の敵を討ってきます。
森　そうですか。
星野　大矢さん、ま、ま、ま、
大矢　支那と戦うのは、あくまで朝鮮独立のためと、
森　・・・そうありたいものです。
大矢　お願いしたい。
森　はい。
島崎　大矢さん、まぁまぁ、こちらに。
大矢　お願いしたい。

＊大矢、島崎、星野に引きずられるように、元の席に戻る。

長谷川　しかし、北村さんも近年は平和主義を唱えていたようですね。
森　はい。
大矢　★この国は、まだまだいくさがたらんのです。
島崎　まぁまぁ、
大矢　北村君は、優しすぎた。
長谷川　そうかもしれない。
島崎　長谷川先生、
長谷川　南北戦争、普仏戦争、ボーア戦争と、列強の国内事情に助けられ、たしかに様々な幸運が重なったとはいえ、よくこの貧乏な国がここまで、
森　えぇ、
長谷川　大久保公が、どこまで意図していたかは分かりませんが、なんのレジティマシーもない新政府が、天皇を国家の中心に据えたことも、思いつきにしては出来すぎていた。
森　はい。
長谷川　しかし、革命を起こさずに国民国家を作るということが、本当に出来るものでしょうか？
森　・・・
長谷川　森先生のふるさとは津和野でしたね。
森　はい。山に囲まれた小さな町です。
長谷川　津和野の百姓たちは、天皇陛下と聞いて涙を流しますか？
森　ながさんでしょうな。まだ津和野では、殿様が君主です。

長谷川　えぇ、
森　島崎さんは、生まれは東京ですか？
島崎　いえ、木曽です。
森　あぁ、
島崎　みんな山の中です。
長谷川　なんだ。
島崎　小学校から東京に、
森　たしか、北村さんと同じ、
島崎　はい。
森　アルマーニの、
島崎　はい。
長谷川　あぁ。
一同　あぁ、
森　だから、てっきり東京の生まれかと、
島崎　違うんです。
長谷川　北村君もたしか、
島崎　★小田原です。やはり小学校から東京で。
長谷川　☆なるほど、

＊下手から、女中Ｂに連れられて、中江兆民、幸徳秋水登場。

１・３・３

女中Ｂ　☆どうぞ、どうぞ、こちらに。
中江　すみません。
幸徳　失礼します。
大矢　中江先生、
島崎　え？
中江　あぁ、大矢さん、
大矢　北海道にいらっしゃるんじゃ？
中江　ちょっと、こちらに用事がありましてね。
大矢　それは、
長谷川　（立って）兆民先生、
中江　あぁ、
長谷川　長谷川です。
中江　うん。
長谷川　お元気そうで、
中江　いや、もう、年をとってしまって、
長谷川　そんな、
森　中江兆民先生でいらっしゃいますか？
中江　はい。
森　森林太郎と申します。
中江　あぁ、あなたが、
長谷川　いま、奥に夏目さんも。
中江　おお、それは、明治の三酔人が揃いましたね。
長谷川　え？
中江　いや、誰が誰とは言いませんが、
長谷川　はぁ、
星野　中江先生、
中江　はい。
星野　文學界の星野と申します。
中江　はい。
星野　あの、失礼ながら、
中江　なにか？
星野　あの、先生は、北村はやはり、自由民権の挫折を引きずっていたとお考えですか？
中江　あぁ、
星野　いかがでしょうか？
中江　さぁ、それは、どうなんだろう？
大矢　いえ、私も、そこのところは、

星野　★私は、文学だけを理由に北村が死んだとは思えんのです。
中江　なるほど、
星野　挫折を引きずっていたと言うより、「昨日民権、今日国権」という大衆の移り気に心底、絶望したんではないかと、
中江　えぇ、
星野　先生は、いかがお考えですか？
中江　たしかに、人間は、一つのことだけじゃ死ねないと思いますけどね、
星野　はい。
中江　ただ、どうでしょうか・・・
星野　え？
中江　北村君は文学のために死んだってことにしておいた方がいいんじゃないかな。
星野　え、え？
中江　その方が、彼は伝説になる。
星野　はぁ、
森　うーん。
中江　残された皆さんは、このあとずっと、北村君のことを考えなくてはならない。
星野　はい。
島崎　はい。
中江　あ、あ、忘れていました。
星野　え？
中江　彼は、幸徳君と言って、やはり土佐の出です。
幸徳　幸徳伝次郎と申します。
星野　はじめまして、
中江　若いけど、なかなかいい文章を書きます。本人は政治を志しているようですが、皆さんとお近づきになった方がいいかもしれない。
幸徳　そんな、先生、
中江　その方が、きっと長生きするよ、君は。
幸徳　はぁ、
中江　では、お参りに、
星野・島崎　ありがとうございます。
女中B　こちらです。
中江　ありがとう。
女中B　どうぞ、

＊中江、幸徳、上手に退場。

1・3・4

星野　僕たちは毎晩、文学について語り合いました。・・・
星野　恋愛についても、
森　えぇ、
星野　舞姫のような小説を、言文一致で書くことは不可能でしょうか？
森　うーん、
星野　森先生、
森　いや、
長谷川　いや、それよりも、そのことに意味があるかだね。
島崎　意味がありませんか？
長谷川　どうだろう。
星野　文学に意味がなかったとしたら、北村の死はなんだったんでしょう。
長谷川　いや、文学に意味がないのではなく、おそらく人生に意味がないんだよ。

鈴木　あ？
島崎　え？
＊国木田独歩、下手から上手に通り抜ける。
森　だれ？
島崎　たぶん、国木田君です。
森　あぁ、
長谷川　あれ、国木田君は、大分にいるんじゃなかったの？
島崎　帰ってくるって言ってました。
長谷川　あ、そう。
島崎　国民新聞に就職するらしいです。
長谷川　へぇ、
佐藤　まぁ、新聞社は景気がいいからね。
鈴木　まぁね。
田中　☆徳富さんとこか、
鈴木　うん。
星野　☆僕たちは狂信的であることを恥じてはならない。この国の文学は生まれてまだわずか数年しか経っていない。まるで赤ん坊のようなものなのだ。古い道徳や人情をベースにした旧社会の残党と戦うにはあまりにひ弱だ。
森　それは？
星野　文學界を作るとき、毎晩、北村は、こんなことをつぶやいていました。
森　うん。
島崎　ツイッターで、
森　うん。
星野　出来るかどうかが問題なのではない。僕たちには他に選択の余地などないのだ。
島崎　ハゲドウ、
田山　ハゲドウ、
星野　戦う以外にどうやって前へ進むことが出来るだろう。
島崎　リツィート、
田山　リツィート、
長谷川　北村君は、若い人の気持ちを引きつけるのがうまかった。
島崎　うまかったのではありません。たぶん、僕たちには、北村さんだけが信じられた。
長谷川　えぇ、
田山　それな、
星野　それな、
佐藤　それな、
森　しかし、赤ん坊なのは、文学だけではないでしょう。
星野　・・・はい。
森　この国は、あまりにひ弱だ。
＊上手から樋口、戻ってくる。
1・4・1
樋口　どうも、
島崎　あぁ、ありがとうございました。
樋口　こちらこそ、ちょっと家の方がバタバタしてしまって、お手伝いもできませんで。
島崎　いや、とんでもない。
樋口　すみません。
島崎　夏さん、森先生と長谷川先生、

樋口　はい。（二人に）樋口夏子と申します。
森　森です。
長谷川　長谷川です。
樋口　よろしくお願いいたします。
森　作品は読ませていただいています。
樋口　そんな、もったいない。
森　いやいや、これからが楽しみですね。
樋口　ありがとうございます。
島崎　あと、田山君は、知ってたっけ？
樋口　あ、はい。
田山　こんにちは、
樋口　こんにちは、
長谷川　しかし、樋口さんこそ、硯友社の方に行ってもよかったんじゃないですか？
樋口　あぁ、さぁ、なんだか私、ああいうの気持ち悪くって、
長谷川　あぁ、
樋口　あ、田山君、ごめんね。
田山　いえいえ、
森　樋口さんは、あれですか、
樋口　★夏と呼んでください、
森　え？
樋口　皆さん、そうお呼びになるんで、
森　あぁ、
樋口　お願いします。
森　では、夏さんは、北村君とは？
樋口　結局、一度もお目にかかれなくって、
島崎　奥さんの話だと、亡くなる日、北村さんは、夏さんに会いに行くと言って家を出たそうなんですが、
森　それは、
島崎　はい。
長谷川　夏さんに会っていれば北村君ももしかすると、
島崎　★えぇ、
樋口　★いえ、それはどうでしょう。
長谷川　え？
樋口　私、北村先生を尊敬していましたけど、お目にかかったら、きっと、ひどいことを言ってしまってたと思います。
長谷川　そうですか？
樋口　北村先生が、こんなに思い詰めてらっしゃるのも知りませんでしたから。
長谷川　そう？
森　どんな、ひどいことを言ったんです、
樋口　え？
森　会っていたら、
樋口　え、だって、
森　大丈夫ですよ、
長谷川　えぇ、（星野に）ねぇ、
星野　☆えぇ、もちろん。
島崎　☆はい。
長谷川　ねぇ
佐藤・田中・鈴木　はい。
長谷川　ほらあ
樋口　あの、え、いや、だって、ひどいじゃないですか『処女の純潔を論ず』とか言っちゃって、なんで女の方の処女性だけを論じて男の童貞は論じないんですか。
島崎　いや、それは、
樋口　黙れ、童貞、

島崎　え、いや、
佐藤　え？
島崎　いやいや、
佐藤　ふーん。
樋口　北村先生は、いや、ここにいる皆さんは、女性っていうのは革命に失敗した男たちの傷口を癒やすための存在に過ぎないとでも思ってるんですか？
佐藤　リツィート、
星　リツィート、
長谷川　いや、そういうわけでは。
樋口　女は恋愛の土俵には上げないってことですか？
長谷川　あ、いや、
樋口　日本相撲協会ですか？
長谷川　え？
樋口　栃ノ心はニクラス・ケイジには似てないと思います
星野　夏さん、
樋口　え？
星野　ちょっと、落ち着いて、
樋口　でも、
星野　だいたい、ちょっとそれは言い過ぎだろう。
樋口　え？
星野　先生方に向かって、
樋口　あ、すみません。
長谷川　いやいや、まぁ、そうですね。
森　えぇ、私たちからお願いしたんだから、正直に言ってくださいって、
樋口　すみません。
森　夏さん、それじゃあ、次の小説の話を聞かせてくれませんか？
樋口　え？
森　なにか、準備をしていると聞きましたが、
樋口　いえ、
森　お願いします。
樋口　だって、私のは、小説と言えるほどのものでもないですから、
森　いやいや、
樋口　本当に、
森　お願いします。
長谷川　私からもお願いします。
樋口　え？
島崎　夏さん、こんな機会は、めったにないんだから、話してみたら、
樋口　はぁ、
森　お願いします。
樋口　えっと、それじゃあ、おおつごもりっていうのを書こうと思ってるんですけど、
森　うん。
樋口　はじめは、そのお峰っていう女の話なんですけど、その家の井戸が、その家っていうのはお峰が女中として働いている家で、井戸が深さが二十メートルくらいあって、深ーい、すげー、あとお勝手とかも北向きだから寒いじゃないですか。で、北風とかも吹いて寒いからかまどの火とかを見ながらあたってたら、ずっとそうしてたわけでもないのに、さぼってんじゃないよとかって、すごく怒られて、なんか、ここを

紹介してくれたおばさんの話だと、奥さんはケチだけどだんなさんはそうでもないって話だったんですけど、いやなら他を紹介するよ、すぐ葉書よこしなよって、葉書ってなんだよメールだろうって、おばさんはでも気に入られればいいこともあるって話だったんです。で、まぁ、いろいろ辛抱して、みたいなお峰が、これをアップしたのが三月二十日の午前四時といって、フセインのイラクからの四十八時間以内の亡命をアメリカが要求して、そもそもなんで、三月なのにおおつごもりなんだよっていう、でも四十八時間以内の亡命がなされなかった場合戦争がはじまるっていう、おおつごもりっていうのは大晦日っていう意味ならしいんですけど、その大晦日までに二両を返さないと年が越せないという、これはお峰じゃなくて本当は親戚の話だったんですけど、親戚が、田町から菊坂のあたりで茄子とか大根とか売ってたのかな、そういうの売ってるじゃないですか。それがお金がなくて、ＡＴＭでも下ろせなくて、

島崎　おろせなかったんだ。

樋口　残高足りなくて。それで、まあ、奉公先はケチだし、井戸が二十メートルくらいで、かまどあたってても怒られるわけでしょう。あと、石の助って言う、あとから出てくる大事な人が、この家の息子で、息子っていうかなんていうの、家から出されちゃった人。

島崎　勘当、

樋口　そうそう、勘当された息子がいて、それはあとから出てきます。それで、四十八時間以内に二両返さないと戦争が始まるっていう、お峰は、奉公先に戻って、それで、引き出しが空いていて、だんなさんが居眠りをしているっていう、だんなさんはいい人らしいんですね。あと子どもたちは庭で羽根つきをしているっていう、それで、お峰はこう言います。

「拝みまする神さま仏さま、私は悪人になりまする、成りたうは無けれど成らねば成りませぬ、罰をお当てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免しなさりませ、勿躰なけれどこの金ぬすませて下されと」

ってだから、実は石の助っていう人が、それ見てたんですけど、でも最後に、その石の助さんが、自分が借りたって奥さんに言ってくれて罪をかぶって、罪かな？　お峰はＡＴＭで二両下ろして、おじさんにあげたっていうのをやって『三月のおおつごもり』を終わります。

島崎　はい。（と二両渡す）

樋口　はーい（ともらって財布に入れる）

島崎　うん。

樋口　これ、五千円札なら夏さんなんだけど、

島崎　そうだね、

樋口　じゃあ、

＊二人歩き出す。

樋口　って、駅まで一緒か。
・・・
樋口　という感じです。

＊一同、拍手。
島崎、樋口の前髪を触る。

樋口　なんですか？
島崎　あ、いえ、失礼。
樋口　え？
島崎　いや、すいません。
森　すばらしい。
樋口　いえ、私のは文学なんかじゃなくて、食うための戯作ですから。
森　いやいや、これは読むのが楽しみです。
長谷川　えぇ、
田山　すげえ、
島崎　うん。
樋口　私は・・・北村先生が自由民権運動の夢破れて、しかし、その思いを文学に向けたことを尊敬しています。
森　えぇ、
樋口　貧しい者たちへの共感が、北村先生の文学の出発点だったと思います。
森　えぇ、
樋口　しかし、それだけにとどまっていては、日本の文学はいつまで経っても、ルサンチマンのままで終わってしまいませんか？
森　うん。
樋口　北村先生の晩年の文学論は、売れない、認められないことの言い訳ととられても仕方ないように思います。
島崎　夏さん、
樋口　みんなだって、そう思ってるでしょう。
島崎　いや、
・・・
樋口　森先生、
森　はい。
樋口　私はこれから、吉原や浅草界隈の貧しい者たちを書いていきます。
森　・・・
樋口　たくさん、たくさん書きます。
森　えぇ。
樋口　でも先生、
森　・・・？
樋口　一つだけ、分からないことがあるんです。
森　なんでしょう？
樋口　私は生活のために小説を書きたいと思っていますが、でも、そこで書かれた貧しい人たちは小説を読みません。
森　・・・
樋口　どうすればいいですか？
森　うん。
樋口　どうすればいいですか？
森　日本がもう少し豊かになる。工業が起こり、労働者が生まれ・・・それから教育がもっと普及して、そうなれば、職工や女給たちも、小説を読むようになるかもしれません。
樋口　・・・本当にそうなりますか？
森　それを信じるのが、私の立場です。

樋口　・・・
森　いや、信じるふりをすると言った方がいい。
樋口　はい。

＊正岡、上手から登場。
1・4・2

島崎　あ、正岡さん、
正岡　よ！（廊下から舞台に上がって）さぁ、まぁ、文学の話もよろしいが、皆さん、外に出て、べーすぼーるでもしませんか？
島崎　え？
正岡　今夜は月も出て、ナイトゲーム日和ぞな。
島崎　正岡さん、
正岡　北村さんも、べーすぼーるをすればよかったぞな。
長谷川　正岡さん、夏目さんは。
正岡　なにやら、北村さんに向かってブツブツ話しとります。
長谷川　はぁ、
正岡　そういう男です。
長谷川　えぇ、
正岡　あしは、命の限りが分かってますけん、自殺などはせんのです。だいいち、生きてるうちにやりたいことが多すぎて、死ねんのです。
長谷川　はい。
正岡　森先生、
森　はい。
正岡　あしも、陸（くが）さんに、従軍のお願いをしとるけん、
森　あぁ、しかし、
正岡　★みな、私の体を気遣って、なかなか許しがでんのです。
森　えぇ、
正岡　そやけど、あしは行きたいぞな。
森　はぁ、
正岡　次にお目にかかるのは、朝鮮か支那になります。
森　えぇ。
正岡　ご武運を。
森　ありがとう。
正岡　九つの人九つの場をしめてベースボールの始まらんとす

＊正岡、下手に退場。
1・4・3

森　・・・
長谷川　行きますか？
森　べーすぼーるですか？
長谷川　えぇ。
森　じゃ、ま、観るだけでも、
長谷川　えぇ・・・皆さんも行きましょう。
全員　はい。
森　日本文学、しまっていこう！
一同　オース、
長谷川　・・・
森　ドイツには、そういったスポーツがありますか？
☆ドイツはフットボールですね。

長谷川　あぁ、そういえば、いまロシアでもフットボールをやっています。
森　☆あぁ、ワールドカップ、
長谷川　プーチンはどうなんでしょう。
森　あぁ、あの人、柔道やるんでしょう。
長谷川　ええ、

田中　☆行くか、
鈴木　うん。
佐藤　ええ、
田中　行こう行こう。
鈴木　うん。
佐藤　え、ベースボールは女子もやっていいの。
鈴木　いいでしょ、別に。
田中　なんか欽ちゃんのとこにいたよね、女子の選手、
佐藤　あぁ、
鈴木　あの人、なんか結婚したんでしょ、
田中　え、そうなの？
鈴木　うん、たぶん。

星野　☆大矢さん、べーすぼーるは？
大矢　いや、私は、
星野　でも、観るだけでも、
大矢　いやぁ、
星野　観るだけでも、なかなか面白いですよ。
大矢　はぁ、じゃあ。
星野　行きましょう。
大矢　うん・・・私はバットよりは刀の方が、
星野　危ないですよ。

樋口　☆田山さんは、行かないんですか？
田山　えぇ、僕は、
樋口　じゃあ、行きましょう。
星良　はい。
樋口　星さんは何処のファン？
星　ベイスターズですね。
樋口　ラミちゃん？
星　はい。あと、筒香選手ですね。
樋口　あぁ、あれ、絶対読めないよね、
星　はい。

＊人々、口々に、「行くか」などと言いながら下手に退場。
島崎と田山だけが残る。
田山、樋口が去ったあとの座布団に突っ伏す。
1・4・4

島崎　（立ち上がって廊下に出て下手に向かって）すみません。お膳、下げてください。
女中A　はーい。
島崎　坪内先生は来ないなぁ
（廊下の障子を開ける）
田山　うん。
島崎　・・・（上手を見てから）夏目さんは、北村さんと何を話してるんだろう・・・（田山を見て）田山君、その女性が座ったあとの蒲団に突っ伏す癖は治した方がいいよ。
田山　（ゆっくり起き上がって）君も女性の前髪にすぐに触ろうとする癖は、治した方がいいよ。

島崎　うん。

＊女中たち、お膳を下げ始める。

女中Ｃ　これも、おさげしていいですか？

島崎　はい、どうぞ、

女中Ｃ　じゃあ、

・・・

島崎　僕は、これから、たくさん詩を書くよ。

田山　うん。

島崎　北村さんが書こうとして書けなかった詩を書くよ。

田山　どんな詩？

島崎　わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな
林檎畑の樹の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

＊田山、再び座布団に突っ伏す。

二場　正岡子規の死

一九〇二年（明治三五年）九月

正岡子規の通夜の晩

＊女中たちがお膳を下げ始めてしばらくすると、上手から真言宗の読経の声が聞こえる。

照明もかすかに変わる。

島崎と田山、居住まいを正して座る。

島崎はＣの３に、田山はＢの３に座っている。

そこに、上手から鈴木さん、田中さん登場。

Ｄの２，３に座る。

２・１・１

鈴木　どうも、

島崎　ご苦労様です。

鈴木　すごい人でしたね。

島崎　えぇ、

田山　正岡さんは、人を引きつける魅力がありましたからね。

田中　全国から、知らない方たちからもいろいろ送られてきてるみたいですね。

島崎　☆まぁ、俳句のお弟子さんも多かったし、

田中　えぇ、

島崎　食いしん坊も有名でしたから、

田中　はい、

田山　☆（座布団を渡す）どうぞ、どうぞ、

田中　ありがとう。
鈴木　ありがとう。

鈴木　島崎さんは、今日は、長野から？
島崎　えぇ、はい。
田中　あぁ、
鈴木　小諸ですか？
島崎　えぇ、古城のほとりです。
鈴木　もう、あちらは寒いでしょう。
島崎　はい、もうすぐ雪になります。
鈴木　あぁ、
田中　あちらでも学校の先生なさってるんですよね？
島崎　はい。小さな学校ですが。
田山　島崎君は、本当にもう詩は書かないの？
島崎　え、あぁ。
田中　え、え、そうなの？
田山　どうも、そうらしいです。
田中　え、どうして？
田山　さぁ、
田中　だって、俺たちだって知ってるくらい有名になったのに。
島崎　いやいや、
田中　だって、キャバクラとかで言うと、すごいよ、俺、ちょっと藤村知ってるからとか言うと。
鈴木　そうそう、
田中　あゝなどかくは触れやすき
君が優しき心もて
かくばかりなる吾がこひに
触れたまはぬぞ恨みなる

鈴木　いいねぇ、
田中　もっと書いてくださいよ、そういうの。
島崎　いや、私はもう詩はやめようと思ってるんです。
田中　えー？
田山　小説を書くらしいですよ。
田中　へー、
田山　ねぇ、
鈴木　まぁ、小説もいいけどなぁ。
田中　★田山さんは、相変わらず、
田山　はい。
鈴木　でも、最近は、ＡＶも大変なんじゃないですか？
田山　うちは、そんな悪質なことはしてないんですけどね。
鈴木　あぁ、
田山　ただ、やっぱりスカウトが大変なみたいです。
鈴木　だよね。
田中　え、え、最近撮ったのなに？
田山　あぁ、一番最近のは、『八甲田山女子大生初めての雪かき』。
三人　おぉ、
田山　次、撮るのが、『金髪日英同盟』。
三人　あぁ、
田山　これは、ＶＲでいきますからね。
・・・
島崎　田山君こそ、きちんと小説を書いた方がいいよ。
田山　いいよ、俺はもう。
島崎　そんな、

＊そこに佐藤さん、上手から登場。
Cの2に座る。
2・1・2

佐藤　何、なんの話してたの？
鈴木　いや、まぁ、田山さんもそろそろ小説書いた方がいいって。
佐藤　あぁ、
田山　はい。
島崎　えぇ、
佐藤　本当はアダルトビデオの話してたんでしょ、
鈴木　してねえよ。
佐藤　あ、そう。
・・・
鈴木　ま、ちょっとしてたけど、
田中　うん。
佐藤　いいよ、別にしてても、
鈴木　☆いや、そういう内容の話じゃなくてね、どこの業界も大変だなって話。
佐藤　あ、そう。
鈴木　本当だよ。

＊そこに森鴎外、相馬黒光（星良）が高浜虚子と河東碧梧桐に連れられて上手から登場。
一挙に、そこかしこで挨拶と紹介が始まる。
2・1・3

高浜　☆どうぞ、どうぞ、みなさん、
森　すみません。
河東　★どうぞ、いま、家族の者も参りますので。
森　はい。
河東　どうぞ、
森　あ、島崎さん。
島崎　ごぶさたいたしております。
森　今日は、わざわざ小諸から、
島崎　はい、古城のほとりです。
森　あぁ、
高浜　ありがとうございます。
島崎　いえ、そんな、
森　たしか、相馬さんのご主人も長野でしたね。
相馬　はい。安曇野です。
森　そう。
相馬　先生、お久しぶりです。
島崎　あぁ、星君。
相馬　ごぶさたいたしております。
島崎　うん、元気そうですね。
森　☆皆さん、本当にご苦労様でした。
高浜、河東　ありがとうございます。
森　高浜君も、河東君も、毎晩、寝ずの看病だったときいています、
高浜　いえ、私たちは、
河東　★ご家族に比べれば、
森　えぇ、
河東　それは、たいへんな、
森　うん。あまり、見舞いにもいけず、申し訳ありませんでした。
河東　いえ、森先生には、折に触れて高価な果物など送っていただき、のぼさんも感謝しておりました。

森　☆いえ、
河東　本当に、
島崎　☆どう、それでパン屋の方は？
相馬　はい、どうにか、おかげさまで、
島崎　そう。
相馬　はい。
島崎　森先生、
森　はい。
島崎　この星君が、嫁ぎ先でパン屋をやってまして、
森　えぇ、えぇ、
島崎　本郷に店を出しまして、
高浜　はぁ、
相馬　中村屋といいます。
河東　あぁ、なんだか見たことある。
相馬　ぜひ、お立ち寄りください。
河東　えぇ。
島崎　お願いします。
河東　うん。
島崎　皆さんも、
一同　はい。
森　それで、夏目さんには？
高浜　一応は伝えましたが、
森　うん。
高浜　手紙が届くのに二ヶ月近くかかりますので。
森　うん。
高浜　はい。
森　スカイプは通じなかった？
高浜　ダメでした。なんか安いアパートに引っ越したんですよね。
森　らしいね。
高橋　Wi-Fiが入ってないらしくて、
森　あ、そう。
河東　（ふところから手紙を取り出して）僕はもうダメになってしまった。毎日わけもなく号泣しているような次第だ。それだから新聞雑誌へも少しも書かぬ。手紙は一切廃止。
森　それは？
河東　ノボさんから夏目さんへの最後の手紙です。
森　あぁ、
河東　下書きが残っていました。
森　えぇ、
河東　いつかよこしてくれた君の手紙は非常に面白かった。近来、僕を喜ばせたものの随一だ。僕が昔から西洋を観たがっていたのは君も知ってるだろう。もし書けるなら、僕の目のあいているうちにいま一便よこしてくれぬか。ロンドンの焼き芋の味はどんなだか聞きたい。
森　夏目さんに、そんな手紙を、
高浜　いえ、最後だけです。
森　え？
高浜　こんなねだるような手紙は最後だけです。
森　それで、夏目さんからの返信はありましたか？
高浜　はい。とても楽しい手紙が、
森　ほー、
高浜　じゃあ、最後のところだけ、
森　えぇ、
高浜　その代わりスイスのチャンピオンと、イギリスのチャンピオンの勝負を見た。西洋の相撲

なんて、すこぶる間の抜けたものだよ。膝をついても横になっても逆立ちしても、両肩がぴたりと土俵の上へ付いてしかも一、二と行事が勘定する間このピタリの態度を保っていなければ負けでないって言うんだから、大いに埒のあかないわけさ。

森　蛙のようにへたばっている奴を、後ろから抱いて倒そうとする。倒されまいとする。

高浜　座り相撲の子分みたような真似をしている。西洋相撲と言えば、伊調選手が受けたパワハラ問題はどうなったのか？　財務事務次官のセクハラ問題しかり。ここロンドンにいると日本の悪いニュースばかりが伝わってくる。そして、すぐ消える。困ったものだ。

森　さて、いまや濃霧窓に迫って書斎昼暗く、時針一時を報ぜんとして我が腹は、食を欲することしきりなり。この美しき数句を千金の掉尾として筆を置く。

高浜　明治三四年十二月十八日　　夏目金之助

森　ほー、

高浜　夏目さんは、ノボさんとの手紙のやりとりのなかで、たしかに新しい散文を掴みつつあるように思います。

森　ええ、

高浜　日本に戻られたら、ぜひ、小説を書いてもらいたいと思っています。

森　ええ、必ず、

高浜　正岡の果たせなかった写生の小説です。

森　ええ、

＊上手から正岡子規の母・八重と妹・律が登場。

２・２・１

河東　あぁ、

八重　すんませんなぁ、どうも、

河東　いやぁ、

律　すんません。

八重　どうも、みなさま、

＊一同、頭を下げる。

八重　本日は、皆様、ご多用にもかかわらず、長男のぼるのために、通夜にご参列くださいまして誠にありがとうございます。

ご承知のように、長患いのなかでものぼるは、こうして皆さんに囲まれて文学の話をするんが何よりの楽しみでした。

今宵はぜひ、皆様に故人の思い出など、お聞かせいただければ幸いです。

今日は本当にありがとうございました。

なお、蛇足ではございますが、昨年来、私どものふるさと愛媛県では、加計学園獣医学部の設置に関して世間をお騒がせしとるところでございます。

私どもは県の職員は、首相官邸で秘書官に会うた、あれは首相がいいねと言うたいう認識でございます。

愛媛県人は、俳句とミカンだけ作っとったらええぞなもし、

高浜　お母さま、

河東　ま、ま、
律　私も一言、ご挨拶させていただいてよろしいでしょうか。
高浜　あぁ、はいはい。
律　妹の律でございます。生前は、わがままな兄を支えていただき、本当に感謝しております。森先生、島崎先生など、遠くからおいでいただき、感謝の念に堪えません。
潔さん、秉五郎さん、まだ受付にいらっしゃる伊藤さん長塚さんなど、ホトトギスの皆さんには、本当に兄がご迷惑をおかけして、ありがとうございました。
高浜　いや、律さん、
河東　とんでもないぞな、
律　兄は、最後まで、たくさんのお友達に囲まれて、幸せでした。
さて、その兄の、最後の心残りが、そもそも、どうして松山中央公園野球場を「坊ちゃんスタジアム」と呼ぶのかという点でした。
夏目さんは、兄のもっとも大事なお友達でしたが、松山のことは悪口しか書いてないことは、皆さんご承知の通りです。だいいち、夏目さんはベースボールにはちっとも興味がなかったぞな。
ぜひ、加計学園問題の汚名をそそぐためにも、この際、「松山坊ちゃんスタジアム」を「のぼるスタジアム」と改称していただきたく、森先生にご尽力いただけないかと願っております。
森　いや、私は、
律　ぜひ、ここは桂太郎閣下に言上願えないかと。
森　いやいや、あれは松山市の球場でしょう。
河東　はい。
森　では、私にはなんとも、
律　それでは、陸軍としては、南スーダンの日報隠蔽問題も、そのままでいいというお考えですか？
森　いや、あれは、あのときの大臣がですね。
鈴木　あ、稲田だ、稲田。
田山　★朋美
佐藤　あれは、なんだったんだろうね。
鈴木　しかし、先生、自衛隊は、やはり憲法には、

＊下手から与謝野晶子と石川啄木登場。

２・２・２

与謝野　★遅くなりました。
高浜　あぁ、
与謝野　すみません。遅くなりまして、
森　どうも、
与謝野　あ、森先生？
森　あぁ、どうも、
与謝野　ごぶさたしております。
森　あれ、与謝野さんは？
与謝野　それが主人がどうも出がけに急に差し込んで、
森　あぁ、それは、
与謝野　すみません。
森　いえ、お大事に。
与謝野　はい。（律に）その節は、大変失礼いたしました。

八重　いえいえ、こちらこそ先生にうちまで来ていただいて、
律　本当にのぼさんが、与謝野先生の悪口ばっかり書いて、
与謝野　いえ、与謝野が、直接会えば誤解も解けると申しまして、
律　はい。
佐藤　え、え、与謝野晶子さんですか？
与謝野　はい。
佐藤　柔肌の？
与謝野　はい。
佐藤　えぇ！　あのサインしてもらっていいですか？
与謝野　はぁ、
鈴木　あんた、ここ、通夜の席だから、
佐藤　あ、あ、すみません。
律　いえ、いいんですよ。
佐藤　すみません。
律　正岡も、『みだれ髪』には、これはやられたゾなと申しておりましたけん。
与謝野　そんな、
森　与謝野さん、お隣は、
与謝野　あぁ、この子は、石川君といって、若いのにいい歌を書くんです。
森　ずいぶん若く見えますが、
石川　おのが名をほのかに呼びて涙せし十四の春に帰るすべなし、
森　え？
与謝野　すいません。この子は、思ったことが全部、歌になっちゃうんです。
森　はぁ、
石川　十六です。
森　え？
石川　律さんですか？
律　はい。
石川　朝はやく婚期を過ぎし妹の恋文めける文を読めりけり
律　はぁ？
高浜　君、
与謝野　すいません、この子、礼儀知らずなんで、
石川　悪気はないんです。
高浜　え？
石川　すいません、僕、天才なんで。
森　・・・
石川　どちらの方ですか？
盛岡の中学校の
露台（バルコン）の
欄干（てすり）に最一度我をよらしめ
与謝野　岩手です。
森　岩手、
石川　はい。
与謝野　あなた、田山さんですか？
田山　はい。
与謝野　あなた、私に何か言うことがあるんじゃありませんか？
田山　申し訳ありません。
与謝野　恥を知りなさい、恥を。
田山　すみません。
与謝野　・・・
それじゃ、失礼して、おまいりを

高浜　はい。
河東　陸先生が、あちらにおいでです。
与謝野　はい。（石川に）行きますよ。
石川　（座を見回して）友がみな　われよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来て　妻としたしむ
与謝野　あなた、まだ結婚してないでしょう。
石川　蟹とたわむる
与謝野　いいから、行きますよ。
石川　はい。

＊石川、与謝野上手に退場。

２・２・３

河東　すげーな、
高浜　うん。
島崎　★何したの？
田山　え？
島崎　与謝野さんに、
田山　いや、与謝野さんの歌をそのままＡＶのタイトルにしたんだけど、
島崎　あちゃー、
鈴木　え、どんな、どんな？
田山　えぇ、
鈴木　いいから、
田山　春みじかし　何に不滅の命ぞと　ちからある乳を　手にさぐらせぬ
・・・
一同　おぉ、
田山　ひとまおきて　をりをりもれし　君がいき
その夜しら梅　だくと夢見し
一同　おぉ、
田山　☆いや、あの、いま、長いタイトルがはやってるんですよ。たぶん、ソフトオンデマンドとかが始めたんだと思うんですけど・・・就職活動で上京し安ホテル代わりに使うネットカフェでは、エロ動画を見てこっそりオナニーをする女子大生が急増！薄い壁越しに聞こえる喘ぎ声が気になり思いきって注意をしたら、強引に女の子の個室に引き込まれ、超発情就活娘と声を殺しながらチョメチョメ・・・みたいな・・・すいません。
田中　なるほど、
河東　☆しかし、与謝野さんの腹痛っていうのは仮病でしょうね。
森　あぁ、まぁ、仲悪かったからね、
河東　いや、それだけじゃなくて、
森　なに？
河東　最近、奥さんに嫉妬が激しいらしいんですよ。
森　あぁ、
河東　自分でプロデュースしたんだから、いいじゃんねぇ、
高浜　まあなあ
河東　妻をめとらば才たけてって、才たけすぎだっちゅうの、
高浜　おまえ、それきつすぎるよ、
島崎　あれって、与謝野さんが朝鮮にいたときに歌った歌なんでしょ、
田山　へぇ、
島崎　やっぱり外国でると、男って盛り上がっちゃ

うのかな、
田山　まぁね、
森　から（韓）にしていかでか死なむわれ死なば
おのこの歌ぞまたすたれなむ
高浜　それは？
森　やはり、与謝野さんが朝鮮から帰ってきたときに歌った歌のようです。
高浜　やっぱり与謝野さんは、閔妃殺しに関わっていたんでしょうか？
森　いや、その日は木浦に行っていて漢城にはいなかったようです。
高浜　あぁ、
森　ですから、少なくとも直接の関わりはないようです。
島崎　大矢さんは最近は、株をやっていると聞きました。
森　おお、懐かしいね。
島崎　私もしばらく、お目にかかっていないんですけど、
高浜　大矢さんっていうのは？
島崎　北村さんの古い友人でね、壮士です。
高浜　あぁ、
森　しかし、さすがに、お弟子さんたちは与謝野さんには辛辣ですね。
高浜　そりゃそうですよ。
河東　うちらは、たけし軍団みたいなもんですからね。
高浜　はい。
森　あぁ、まぁ、ちょっと似たとこがあるね、
高浜　え？
森　北野さんと正岡君と。
高浜　あぁ、
河東　えぇ。
高浜　☆のぼる軍団、
河東　おぉ、
鈴木　☆あれ、結局収まったの？
佐藤　さぁ、
＊国木田独歩、下手から上手に通り抜ける。
２・３・１
島崎　あれ？
田山　国木田君、
国木田　（手を上げて上手に退場）
島崎　あらら、
田山　いっちゃった、
島崎　すみません。
高浜　☆いえ、
田中　☆いま、鈴木メソッドで歩いて行ったよ。
佐藤　うん。
鈴木　森先生、
森　はい。
鈴木　あの、
森　なんでしょう？
鈴木　いよいよロシアと戦争になりますか？
森　あぁ、どうでしょうか。
田中　★伊藤公は相変わらずの弱腰ですか？

森　いや、まぁ、伊藤公でなくても、ロシアと戦争をしたい政治家はおらんでしょう。
田中　それは、そうでしょうけど、
森　まぁ、しかし、やるなら、いまでしょうね、
河東　やはり、そうですか？
森　シベリアの鉄道が、あと何年かで全通します。そうなれば、彼我の兵力は数倍に開く。
河東　はい。
森　しかし、もともと国力が違いすぎる。
河東　まぁ、それは、わかりきったことで、
高浜　★たしか、長谷川先生は、いま？
森　ハルビンから、旅順の方に向かったと聞きました。
高浜　え、そうなんですか？
森　坪内さんの所には、時々手紙が来るらしいんだけど。
高浜　はぁ、
島崎　あれ、そういえば、坪内先生は？
河東　あぁ、遅いですねぇ。
田山　あの人、いつも遅くない。
島崎　まあなぁ。
河東　長谷川先生は、日本がロシアと戦うことにためらいはないんでしょうか？
森　え、どうして？
河東　あれほど、ロシアの文学を愛していらっしゃるのに。
森　いや、彼は、愛してはいませんよ。
河東　でも、しかし、
森　彼がロシア語を学んだのは、お国のためです。あるいは個人の栄達のためです。
河東　そんな、
森　栄達と言っては失礼だが、皆さんはご存じないかもしれませんが、長谷川君は士官学校を三度受け、三度失敗しています。
河東　え？
森　強い近眼のせいです。
河東　あぁ。
森　彼がロシア語科を選んだのは、せめて言葉を学んで、お国のために尽くしたいと考えたからです。
河東　では、長谷川さんは、なぜ文学を？
森　大学の授業でロシアの小説を読むうちに、驚いたのだと聞きました。
河東　え？
森　日本の小説は人生の一部を取り上げる。恋愛にしても金銭にしてもです。田山君、
田山　はい。
森　尾崎さん、『金色夜叉』大ヒットですね。
田山　はい。一昨年は、アマゾンでランキング二位だったと聞いています。
森　一位は？
田山　『火花』
全員　○あぁ、
森　しかし、ロシアの作家は、欧州の作家と言ってもいいですが、特にロシアの作家は、そうではなかった。彼らは、これを人生の問題全般にわたって考えている。人間と社会の問題として考えている。
河東　はぁ、
森　島崎君、

島崎　はい。
森　ツルゲエネフの『あひびき』はお読みになったでしょう？
島崎　はい、もちろん。
森　あれが納められている『猟人日記』という短編集は、皇帝の心を動かし、奴隷解放に大きな力を与えたと言われています。
島崎　はい。
森　日本の小説に、そのようなことができるのかどうか。
島崎　はい。

＊伊藤左千夫、大きな木の箱を持って、下手から登場。

２・３・２

伊藤　すいません。
高浜　★あぁ、伊藤さん、すみません。
伊藤　★いや、
河東　★申し訳ない。
伊藤　いやいや、それはいいんですが、
河東　もう受付は？
伊藤　えぇ、あらかた。
河東　ご苦労様です。
高浜　★ご苦労様です。
伊藤　あの、相馬さん、
相馬　はい？
伊藤　なにか、こちらのお嬢さんが、
相馬　え？

＊野上弥生子、同じく箱を持って下手から登場。

相馬　あぁ、
野上　すいません。おそくなって、
相馬　弥生ちゃん、ありがとう。
伊藤　なんですか、これ？
相馬　パンです。
伊藤　いや、パンは分かりますけど、
相馬　クリームパン、試作品です。
伊藤　はぁ、
相馬　木村屋さんのあんパンやジャムパンに負けないように目玉商品が作れないかと思って、
高浜　なるほど、
一同　あぁ、
相馬　あ、あ、この子は女学校の後輩で、古手川弥生子さん。
野上　こんにちは、
一同　こんにちは、
相馬　ほら、この人が島崎先生、
野上　あぁ、
島崎　どうも、
野上　先生の授業が受けられなくって残念です。
島崎　いまは、何年生ですか？
野上　まだ二年です。
島崎　あぁ、じゃあ、まだ、これから／。
野上　はい。
相馬　★でもね、もう少ししたら、この子、許嫁と結婚するんですよ。
島崎　ほう
野上　やだ、恥ずかしい。

島崎　お相手は？
相馬　野上さんって、一高の学生さんだそうです。
高浜　あぁ、野上君、
野上　はい。
相馬　★ご存じですか？
高浜　夏目さんの授業を受けてたと思うけど、
野上　はい。
高浜　なんだ、野上君のフィアンセか。
野上　☆はい。
相馬　☆あ、あ、すいません。これ、皆さんで、
　　ちょっと食べてみてください。
八重　はい。
律　☆☆ありがとうございます。

野上　☆☆どうぞ、どうぞ、
高村　ありがとう。
島崎　ありがとう。
田中　すいませんね、
野上　いえいえ、
佐藤　クリーム？
野上　クリームパンです。
佐藤　へー、

相馬　森先生、どうぞ、
森　はい、じゃあ。
相馬　どうぞ、どうぞ、
八重　これは、おいしいぞな、
律　えぇ、
相馬　そうですか。
八重　のぼるに食べさせてあげたかったぞな、

律　えぇ、のぼさんは甘いものがたいそう好きでしたけん。
八重　はい。
相馬　あぁ、じゃあ、ご仏前に、
八重　はい。
律　ありがとうございます。
伊藤　★あの、これ、クレームというのは、牛の乳で作るんですよね。
相馬　はい。
伊藤　もし、よかったら、うちの牧場の乳を使ってもらえませんかね。
相馬　え？
高浜　伊藤さんは、美しい歌をたくさん詠まれるんですが、本所で牧場もやってらっしゃるんです。
相馬　あら、
伊藤　はい。
相馬　それは、ぜひ、
伊藤　牛飼が歌よむときに世の中の新しき歌大いにおこる
森　おぉ、
一同　おぉ、
伊藤　おそまつです。
森　いやいや、

＊幸徳秋水、下手から登場。
２・３・３

鈴木　あ、あ、
佐藤　幸徳さんだ、

幸徳　★どうも、遅くなりまして、
律　あぁ、どうも、わざわざ、
幸徳　すみません、こんなに遅くなってしまって、
律　いえ、わざわざ、
幸徳　同じ四国の者として正岡さんのご活躍は、かげながら尊敬しておりました。
律　ありがとうございます。
高浜・河東　ありがとうございます。
森　幸徳さん、
幸徳　ごぶさたいたしております。
森　中江先生は残念でしたね。
幸徳　はい。
律　すんません、兄が、悪口ぎり書いて、
幸徳　いや、そんな、
律　兄は、先生と似たような境遇にいたもんですけん、『一年有半』の売れ行きに焼き餅を焼いとったぞな、
幸徳　☆いえ、
高浜　☆えぇ。
八重　すいません。
幸徳　とんでもないです。
八重　本当に、
幸徳　正岡さんは、最後まで食欲があって、
八重　はい。
幸徳　兆民先生は、豆腐しか喉を通りませんでしたきに、
八重　あぁ、それはつらかったですねぇ。
幸徳　はい。
森　幸徳君、
幸徳　はい。
森　田中正造先生の直訴文は、君が書いたと聞きましたが。
幸徳　いえ、私は、少しお手伝いをしたまでで。
森　たいへんな名文だったとききましたが。
幸徳　いえ、いかに名文でも、届けたい人に届かなければ意味がありません。
森　うん。
鈴木　☆なんか、山本太郎も直訴してたよね。
田中　あぁ、してた、してた。
佐藤　☆これ、本当おいしいですね。
相馬　ありがとうございます。

＊国木田独歩、下手から登場。
２・３・４

島崎　☆あ、来た来た。
国木田　どうも、
田山　遅かったね、
国木田　ごめん、
島崎　国木田君です。
八重　どうも、ありがとうございます。
国木田　こちらこそ、遅れて失礼いたしました。
高浜　陸さんは？
国木田　いま、いらっしゃると思います。
高浜　あぁ、
野上　国木田先生でいらっしゃいますか？
国木田　はい。
野上　☆佐伯の鶴谷学館にいらっしゃった。
国木田　あぁ、えぇ。

野上　私、臼杵の出なんです。
国木田　あぁ、
野上　古手川といいます。
国木田　古手川さんというと作り酒屋の、
野上　はい。先生のお名前はかねがね、
国木田　いや、そんなことはないでしょう。
野上　本当に、
国木田　そうですか。
野上　はい。

幸徳　☆じゃあ、お参りを、
律　ありがとうございます。
八重　ありがとうございます。
幸徳　それじゃあ、

＊幸徳、上手に退場。

国木田　ちょっと失礼、
野上　はい。
国木田　森先生、
森　うん。
国木田　ごぶさたいたしております。
森　いや、こちらこそ、
国木田　すみません。
森　ちょうど、さっき、長谷川君の『あひびき』の話をしていたところです。
国木田　あぁ、
森　『武蔵野』は本にはしないんですか？
国木田　いや、あれは、
森　★書物にするに値するものだと思いますが。
国木田　ありがとうございます。
森　あれは、やはり、『あいびき』の？
国木田　はい、田山君が持って来てくれた『あひびき』を読んで、せかされるように書きました。
森　えぇ。

佐藤　☆肉、肉？
田中　違うよ。
佐藤　あ、そう。

国木田　しかし、あれでは、
森　うん、
国木田　○私には書くべきことがないんです。
森　いや、『牛肉と馬鈴薯』も素晴らしかった。
国木田　☆☆ありがとうございます。

佐藤　☆☆やっぱり肉じゃん。
田中　まぁね。

森　しかし、あれがすべて会話体で書かれているのは、やはり象徴的ですね。
国木田　あれしか、いまの私には、
森　うん。あれを読んで、的外れかもしれないが北村さんのことを思い出しました。
国木田　え？
森　北村さんが、ドラマ、ドラマと言っていたのは、存外間違っていなかったかもしれない。
島崎　先生、それは、
森　私たちはたしかにこうして話をしている。
島崎　はい。

森　しかし、話していること、あるいは思っていることを文にしようとすると、旧来の堅苦しい表現になったり、あるいは書きたいものと異なってしまう。

島崎　はい。

森　まずは話し言葉だけで物語を作ってみるという国木田君のアイデアは悪くない。

国木田　恐縮です。

森　ただ、兆民先生も『三酔人経綸問答』は素晴らしかった。

国木田　えぇ、

森　でも『一年有半』は駄作です。幸徳君には申し訳ないが、正岡君の書いていたとおりです。

河東　はい。

森　私たちには、まだ散文が書けない。思ったことが、文章にできない、哲学も、小説も。

田山　森先生、でも、それは日本語が、まだ、

森　★ヨーロッパもまた、セークスピア、モリエールの蓄積ののちに小説が生まれます。

島崎　しかし森先生、僕たちは／

森　そう。私たちは、もうすでに翻訳という形で正解を知ってしまっている。

島崎　はい。

森　それは、文学だけではない、日本の社会のすべてが抱える苦しみです。

・・・

森　私たちは答えを知っている。しかし、そこにどうたどり着いていいか分からない。この赤ん坊は、あまりに早熟です。頭ばかりが大きくなっている。だから、よく転ぶ。

田山　森先生、僕たちは、

森　もうすぐです・・・この中のどなたかが、きっと　新しい小説を最初に書くでしょう。北村さんが書こうとしていたもの、正岡君が書きたかったものを必ず誰かが成し遂げるでしょう。

島崎・田山・国木田・伊藤　はい。

＊陸羯南、与謝野晶子、上手から登場。

２・４・１

高浜　あ、陸先生。

陸　うん。

高浜　ありがとうございました。

陸　ちょっと、私は一旦、社に戻ります。

高浜　☆あぁ、はい。

河東　☆あれ、さっきの少年は？

与謝野　なんだか、ワンワン泣いて棺から離れないもんですから。

河東　えぇ？

与謝野　泣き虫で生意気なんです。

河東　あぁ、

陸　どうも、このたびは皆さん、正岡君のためにお集まりいただきありがとうございます。

森　陸さんこそ、最後まで正岡君をよく面倒みてくださいました。

陸　いや、私は、

森　本当に、

陸　まだまだ本人は、やりたいこと、やり残した

ことが多かったかと思いますが、しかしまぁ、短い人生で、よくあれだけの仕事を残したと思っております。

森　はい。

陸　俳句、短歌の革新はもちろんですが、写生文という発見は、おそらく本人も気がついていない新しい鉱脈だと信じております。それは民権だ国権だといったイデオロギーを離れて、じっと見るということです。社会を、きちんと自分のまなこで見るということです。

森　どうか、ここにいる皆さんで、正岡が望んだ新しい文学を作っていただければと存じます。いま、ちょうど、そんな話をしていたところです。

陸　そうでしたか。

高浜　はい。

陸　皆さん、ご承知の通り、正岡君は末は博士か大臣かという青雲の志をもって、十六歳でふるさと松山をあとにしました。

世の人は四国猿とぞ笑ふなる　四国の猿の子猿ぞわれは

正岡君の歌で、私が一番好きなものです。

しかし、彼は、のちに文学と出会い、それを一生の仕事とすることが、この国のためと信じ、短い命の灯火を燃やし尽くしました。

おそらく、文学の発展と国の発展を同じに捉えられる、そんな、最後の男だったかもしれません。

その意味では、正岡君は、いいときに亡くなったのかもしれない。

八重　はい、

律　ありがとうございます。

陸　それでは、

一同　ありがとうございました。

＊陸羯南、下手に退場。

ここから、人々は三々五々、退場していく。

与謝野　それじゃ、私も、

河東　え、そうですか？

与謝野　あの、石川君、お願いしていいですか？

河東　え？、

与謝野　☆かえりみちは分かると思うんで、

河東　はぁ。

与謝野　失礼します。

律　ありがとうございました。

八重　ありがとうございました。

森　☆じゃあ、私もそろそろ

田山　え、そうですか？

森　うん、もうそろそろ、

田山　はい、じゃあ。

国木田　じゃあ、先生、私も、

森　え、そう？

国木田　いま、ちょっと新しい雑誌の準備をしているものですから、

森　あ、そう。

国木田　写真を中心にした、新しい雑誌を出そうと思って、

森　そうですか、

国木田　はい。
森　それじゃあ、
一同　ありがとうございます。
与謝野　国木田さんは、いまも渋谷村に？
国木田　いえ、もう引っ越しました。
与謝野　あぁ、なんだ。
国木田　▲あのあたりも、なかなかうるさくなってきて、
与謝野　▲あぁ、えぇ。
森　▲あれ、パルコっていま、閉まってるの？
国木田　▲なんか、来年、リニューアルみたいですけど、
森　▲なんか、渋谷って、ずっと工事してるよね、
国木田　▲えぇ、

＊与謝野、森、国木田、下手に退場。

２・４・２

河東　まぁ、じゃあ、僕たちも、そろそろ、
八重　え？
河東　☆☆今夜は、ひとまず、
八重　そうですか？
高浜　また、明日、早くに伺います。
律　☆☆☆すみません。
佐藤　☆☆しまった、サインもらうの忘れた。
田中　あぁ、
野上　☆☆☆あの、島崎先生、
島崎　はい。
野上　あの、島崎先生は北村透谷先生とご一緒だったんですよね。
島崎　えぇ、まぁ、
野上　あの、野上の同級生に、やっぱり北村先生みたいな人がいるんです。
島崎　え、どういうこと？
野上　なんだか、いつも、思い詰めていて、
島崎　そう、
野上　藤村君っていうんですけど、
島崎　へー、
田山　どういうふうに？
野上　いつも、ブツブツ言ってるんです。
田山　うん。
野上　悠々たる哉天壌、遼々たる哉古今、五尺の小躯を以て此大をはからむとす、とか、
田山　ほー、
野上　大丈夫ですかね？
田山　一高生？
野上　はい、やっぱり夏目先生の授業を一緒にとっていたそうです。
田山　あぁ、
島崎　まぁ、エリートさんはなぁ、
田山　うん。
高浜　藤村君？
野上　藤村操っていいます。
高浜　へー、
田中　変な名前、
佐藤　☆♪あなたーのために、
鈴木　オー、『涙の操』、
田中　あぁ、

高浜　☆安倍君は元気ですか？
野上　あ、はい。
高浜　（河東に）野上さんってのは、よししげと同じクラスだから。
河東　あぁ、そうか。
野上　藤村、安倍、岩波が、三羽がらすだって、よく言ってます。
高浜　☆☆へー、
河東　よししげがなぁ、
田中　☆☆でも、島崎さんの藤村っていうのも、変な名前ですよね、考えてみると、
島崎　いや、
佐藤　まぁね。
鈴木　たいてい、島崎ふじむらって読むよね。
田中　そうそう、
島崎　まぁ、よく言われます。
佐藤　え、でも、いいんじゃないの松尾スズキみたいで。
鈴木　あぁ、そうか。
田中　ちあきなおみとか、
佐藤　いや、それは、名字が名前みたいなんでしょう。
田中　あぁ、まぁね。
田山　正宗白鳥。
三人　おぉ、
鈴木　マスダオカダ、
田中　それ、コンビ名だから、
鈴木　あぁ、そうか。
田中　うん。
佐藤　レディ・ガガ
鈴木　全然、意味わかんない。
佐藤　うん。
田中　あの、あの、おれ、ずっと、高浜さんって、女の人だと思ってたんですよ。
高浜　あぁ、
鈴木　高浜きょこ？
田中　そうそう、（高浜に）すいません。
高浜　いえいえ、
・・・
河東　正岡子規
高浜　正岡子規
伊藤　正岡子規
律　のぼさーん、

＊律、走って上手に退場。

・・・
鈴木　それじゃあ、そろそろ、私たちは、
河東　え、そうですか？
鈴木　はい、そろそろ、
田中　うん、そうだね。
佐藤　えぇ、
河東　☆今日は、どうも、本当にありがとうございました。
佐藤　いえいえ、とんでもない。
八重　ありがとうございました。

＊口々に、「ありがとうございました」と「なにもできませんで」などが取り交わされる。

相馬　☆あ、じゃあ、私も
田中　そう？
相馬　はい、そこまで、
田中　うん、じゃあ、行こう。
相馬　ありがとうございます。
田中　いえいえ。
野上　あ、相馬さん、じゃあ、私、お参りだけして、
相馬　そうね、
野上　はい。
相馬　（八重に）これ、じゃあ、ご仏前に、
八重　あぁ、ありがとうございます。
相馬　箱は、あとでうちの者が、
八重　すいません。
佐藤　さっきの本当おいしかったです。
相馬　☆え？
佐藤　▲パン、
相馬　▲あぁ、
佐藤　▲クリームパン、
相馬　▲ありがとうございます。
佐藤　▲早く売り出して、
相馬　▲はい。

＊四人、下手に退場。

2・4・3

河東　☆じゃあ、僕たちも、のぼさんの顔だけもう一度観て、
八重　えぇ、
伊藤　そうだね。
伊藤　行きましょう。
野上　はい。じゃあ、ご仏前に。
伊藤　うん。

＊みな、一同に立ち上げる。

八重　島崎さんたちは、どうぞ、もう少し、ごゆっくり、
島崎　いえ、そんな、
八重　☆もう少しだけ、
伊藤　★すぐ、僕たちも戻ってきますから。
島崎　え？
伊藤　もう少し、お話を、
島崎　あぁ、はい、じゃあ。
田山　はい。
高浜　☆よししげは、最近、能成って言ってるらしいよ。
河東　へー、
高浜　安倍能成って、陰陽師かっつうの、
河東　あぁ、ねらってんな、そこ、
高浜　でしょ、

＊一同、上手に歩き始める。

河東　あの、石川君ってのは、まだ泣いてるのかな。
高浜　あぁ、どうでしょう。
河東　▲なんなんだ、あいつ、

高浜　▲でも、歌はすごかったよ
河東　▲うん。

＊一同、上手に退場。
島崎と田山だけが残る。
２・４・４

田山、相馬が去ったあとの座布団に突っ伏す。
島崎、立ち上がって廊下に出て、下手の方を見る。

島崎　坪内先生は来ないなぁ。
田山　うん。
島崎　・・・（上手を見てから、田山を見て）

＊女中Ｃ、下手から登場。

女中Ｃ　あれ、もう皆さん？
島崎　えぇ、
女中Ｃ　あれ、こちらのかたは？
島崎　え？
女中Ｃ　具合でも悪いんですか？
島崎　はい、まぁ。
女中Ｃ　あら、飲み過ぎ、食べ過ぎ？
島崎　いえ、まだ、私たちは、何もこなしきれていないんです。
女中Ｃ　あらー、
島崎　はい。
女中Ｃ　ちょっと寒くなってきましたね。

＊と言いながら障子を閉める。
女中Ｃ、いったん、下手に退場。
やがて女中たち、お膳を下げ始める。
その中には、先ほどまで八重だった女中Ａも混ざっている。
島崎、廊下の障子を閉めて席に戻る。

女中Ａ　これも、おさげしていいですか？
島崎　はい、どうぞ、
女中Ａ　じゃあ、
・・・
島崎　僕は、やっぱり、小説を書くよ。
田山　（起き上がる）うん。
島崎　北村さんが書こうとして書けなかった小説を書くよ。
田山　どんな小説？
島崎　いままで、日本人が誰も主人公にしなかった者を主人公にする。
田山　・・・大変だね。
島崎　うん。

＊田山、再び座布団に突っ伏す。

三場　二葉亭四迷の死

一九〇九年（明治四二年）六月
二葉亭四迷の葬儀の午後

＊女中たちがお膳を下げ始めてしばらくすると、上手から曹洞宗の読経の声が聞こえる。
照明もかすかに変わる。

島崎と田山、居住まいを正して座る。
島崎はCの3に、田山はBの3に座っている。

そこに、上手から鈴木さん、田中さん登場。
Dの2，3に座る。
3・1・1

鈴木　どうも、
島崎　ご苦労様です。
鈴木　すごい人でしたね。
島崎　ええ、
田山　やはり、皆さん、長谷川さんには、何となくあれ、ひかれるものがありましたからね、
島崎　うん。
田中　でも、そんなに小説は書いてないんですよね、
田山　はい。
田中　ねぇ、
鈴木　『平凡』は読んだけどな、
島崎　長谷川さんは、いつも、どうも小説には真剣になれないとおっしゃってたんで、
田中　あぁ、
島崎　でも、そのことがかえって、私たちには何となく気になってしまって、
田中　なるほど、
鈴木　あぁ、
島崎　まぁ、
田山　うん。
・・・
田中　しかし、お二人とも、立派になられて、
島崎　いやぁ、
鈴木　田山先生も、まさかね、
田山　先生とかやめてくださいよ、
鈴木　いやいやいや、
田中　★いや、よかったよ、でも。
田山　はい。
鈴木　あれですか、やっぱり、相当、こちらの方も？（手で丸を作る）
田山　いえいえいえ、そんな、
鈴木　いやぁ、そんなことないでしょう。
田山　いや、そんな、小説一本あたったくらいじゃ、
鈴木　いやいやいや、
田山　本当ですよ。
田中　ま、でも、もてるようにはなったでしょう、銀座とかで。
田山　いや、それも、島崎先生ほどじゃないですよ。
島崎　なにいってんの、
田山　いや、それはもう。
鈴木　まぁなぁ、それは。
田山　銀座のホステス、破壊しまくりみたいな、
田中・鈴木　おお、
島村　やめてよー、

田山　前髪触りまくり、

＊石川啄木、与謝野晶子、若山牧水、北原白秋を連れて、下手から登場。
3・1・2

石川　☆どうぞ、どうぞ、こちらに
与謝野　ありがとう。
若山　ありがとう。
北原　ありがとう。
島崎　あぁ、与謝野先生、
与謝野　どうも、
島崎　☆☆お久しぶりです。
与謝野　ご活躍で、
島崎　いえいえ、

田山　☆☆おぉ、北原君も、
北原　ごぶさたいたしております。
田山　すごいね、『邪宗門』
北原　☆☆☆いえいえ、なかなか、先生方のようには、
田山　またまたまた、

石川　☆☆☆島崎さん、
島崎　はい。
石川　あちらは、僕の友人で若山君といいます。
島崎　あぁ、
若山　若山です。
島崎　島崎です。

石川　人並みの才に過ぎざる
わが友の
深き不平もあはれなるかな
一同　おう、
若山　いや、僕は、
与謝野　早稲田を出たばかりなんですが、本当にいい歌を作るんです。
島崎　あぁ。
若山　いえ、
石川　★先生、それじゃあ、こちらに。
与謝野　えぇ、
石川　僕はまだ、受付に戻るんで、
与謝野　ありがとう。
若山　ありがとう。
北原　ありがとう。
石川　森先生たちも奥に、
与謝野　▲はい。

田中　☆☆☆え、だれ？
鈴木　白秋だろう、
田中　え？
鈴木　北原白秋、
田中　あぁ、
鈴木　雨雨降れふれの人、
田中　うん。

＊与謝野、若山、北原、上手に退場。

島崎　忙しそうですね。
石川　受付の人手が足りなくて、

島崎　あぁ、
石川　こころよく
我に働く仕事あれ
それを仕遂げて死なむと思ふ
・・・
石川　それじゃ、
島崎　はい。
石川　あ、鈴木さん、
鈴木　はい。
石川　名は何と言ひけむ。
姓は鈴木なりき。
今はどうして何処にゐるらむ。
鈴木　え？
石川　それじゃ？

＊石川、下手に退場。
3・1・3

鈴木　なんだ？
・・・
田山　ほらー、
島崎　なに？
田山　カン無視だよ
島崎　え？
田山　与謝野先生も、石川君も、
島崎　いや、それは、、
田山　もう、本当、評判悪いんですよ、おれ、
鈴木　いや、そんなことないでしょう。
田山　長谷川さんも、相当俺のこと嫌ってたみたいだし。

島崎　いや、それはさ、
田山　俺は、こんなに尊敬してたのに。
田中　ま、ま、ま、田山君。
島崎　自意識過剰だよ。
田山　ま、それは、俺の芸風だからね。
島崎　うん。

＊上手から、森鴎外、夏目漱石、佐藤さん登場。
森、夏目はA列に。佐藤はD列に座る。
3・2・1

森　いやいや、みなさん、ご苦労様です。
島崎　どうも、
田山　どうぞ、どうぞどうぞ（座布団を勧める）
森　ありがとう。
夏目　ありがとう。
田山　夏目先生、
夏目　はい。
田山　田山です。
夏目　☆あぁ。
森　ご活躍ですね。
田山　いえ、とんでもない。
佐藤　☆どうも、
鈴木　どうも、
佐藤　あ、どうも、
島崎　こんにちは、
田中　（夏目に）しかし、長谷川さんは残念でしたね。
夏目　はい。

森　せめて、日本の土を踏みたかったでしょうが、
田中　ええ、
佐藤　やっぱりロシアの冬って言うのは寒いんでしょうね。
森　ええ、おそらく、
鈴木　さっき、なんだか残されたご家族が大変だって聞いたんですけど、
夏目　ええ、まぁ、
鈴木　やっぱり、
夏目　遺言では、家族はバラバラに生きていくようにとのことでしたが、
鈴木　はぁ、
夏目　まぁ、そういうわけにもいかないので、朝日の、社の方で色々考えてはいるようです。
鈴木　なるほど、
島崎　それは、どんな？
夏目　あとから、池辺さんから話があると思いますが、まず全集を出すことになるでしょう。
島崎　あぁ、
夏目　校正には、石川君が就くことになったようです。
島崎　石川君が、
田山　大丈夫ですか、あいつで？
夏目　言葉を選ぶ力は抜群ですから、きっと彼自身のためにもなるでしょう。
田山　はぁ、
夏目　☆石川君は生活も苦しいようだから、
田山　☆どうぞ、どうぞ、
森　ありがとう。
島崎　私たちにできることがあれば、なんでも、
夏目　ありがとう。
島崎　いえ、長谷川先生には、国木田のときに、たいへんお世話になりましたから。
夏目　あぁ、
森　そうか。
夏目　二人集ね、
島崎　☆☆はい、あれで入院費を賄うことができました。
夏目　うん。
島崎　はい。
鈴木　☆☆次郎長だ、
田中　え？
鈴木　清水の次郎長、
田中　関係ないでしょう。
鈴木　うん。
夏目　たしか、『牛肉と馬鈴薯』のロシア語訳も、
島崎　はい。
田山　長谷川先生は、国木田のことだけは高く評価してましたから、
森　えぇ。
田山　僕のことは嫌いだったみたいですけど、
森　そんなことはないでしょう。
夏目　『平凡』は、『蒲団』から大いに刺激を受けて書かれたと聞いていますよ。
田山　悪い方の刺激です。
島崎　田山君、
鈴木　なんか、さっきからひがみっぽいんですよ、

彼。
夏目　そう、
田山　だって、
森　なに？
田山　だって、エロいって言ったら、国木田の方がエロいじゃないですか、
島崎　田山君、
田山　サナトリウムに嫁と愛人と両方連れてったんですよ。
森　あぁ、らしいね。
田山　死にかけてるくせに、
森　☆うん。
田山　どういうことですか、それ？
森　☆☆うーん。
島崎　☆☆まぁまぁまぁ、

＊下手から啄木、幸徳秋水と管野スガ子を連れて登場。

3・2・2

石川　☆どうぞ、どうぞ、こちらに、
幸徳　すみません。
石川　どうぞどうぞ、
夏目　あぁ、石川君、
石川　すみません、慌ただしくて、
夏目　いや、
石川　こころよき疲れなるかな
　　息もつかず
　　仕事をしたる後のこの疲れ
夏目　うん。

石川　それでは、
幸徳　あ、はい。
石川　▲「労働者」「革命」などといふ言葉を聞きおぼえたる
　　五歳の子かな。

＊石川、下手に退場。

幸徳　皆さん、ご無沙汰しております。
一同　どうも、
幸徳　管野君です。
森　あぁ、
管野　管野と申します。
鈴木　え、え？
島崎　赤旗事件の、
鈴木　あぁ、
森　あぁ。
幸徳　それでは、お参りに。
島崎　はい。
森　（呼び止めて）幸徳君、
幸徳　はい。
森　くれぐれも自重して、
幸徳　はい。
森　山縣公は、本気です。
幸徳　えぇ、
森　お願いします。
幸徳　私は、土佐に戻って翻訳でのんびり暮らしていきたいと思ってるんですが、
森　うん、それがいい。
幸徳　えぇ、

森　・・・
幸徳　あの、和歌山の方は？
森　ドン・ファンですか？
幸徳　いや、そっちじゃなくて、
森　あぁ、大石さんですね。
幸徳　うん。
森　あの人はただの町医者ですよ。
幸徳　ですから、あまり周りを巻き込まないように。
森　はい。
幸徳　お願いします。
幸徳　はい。
管野　・・・
幸徳　行こうか、
管野　はい。

＊幸徳、管野、上手に退場。

３・２・３

田山　・・・
田山　あれ、どうなんですか？
夏目　なに？
田山　荒畑君は、まだ牢屋の中なんでしょう。
夏目　そうだね、
田山　だって、あの二人。
夏目　まぁな。
田山　いや、まぁなじゃなくて、
夏目　なに？
田山　だから、なんで、俺だけ、変態みたいに言われるのかってことですよ。
夏目　あぁ、
田山　あいつらの方が、よほどひどいじゃないですか。
夏目　うん。
島崎　まぁまぁ、
田山　だって、俺は妄想だけだよ、何にもひどいことしてないよ。
島崎　分かったから、
田山　なんで、リア充の奴らは責められないわけ、
島崎　そうだね。
夏目　・・・
森　しかし、国木田君は、本当に残念なことをしました。
夏目　私がもう少し早く、世に出してあげればよかったんだけど、
鈴木　いや、
田中　人気絶頂で死にましたからね、
夏目　うん。

＊石川啄木に連れられて、河東碧梧桐、相馬黒光、野上弥生子、高村光太郎、下手から登場。

３・２・４

石川　「さばかりの事に死ぬるや」
「さばかりの事に生くるや」
よせよせ議論
石川　・・・
高浜　どうぞ、どうぞ、こちらに。
夏目　はい。
河東　あぁ、秉五郎君。
すみません。遅れまして、

夏目　いやいや、
野上　先生、ごぶさたいたしております。
夏目　☆あれ、ご主人は？
野上　野上は、なんだか、どうしても学校の方で外せない用事があるようで、
夏目　あ、そう。

森　☆相馬さんも、お元気そうで
相馬　はい。
森　新宿の方はどうですか？
相馬　まだ人通りは少ないですが、ぼちぼち、
森　そう。
相馬　看板は、河東さんに書いていただいたんです。
森　そう。
河東　いやいや、お恥ずかしい。
森　いろいろな方が訪れているようですね。
相馬　はい。主人が、若い人たちを助けたいと申して、
森　素晴らしい、
相馬　いえ、そんな、
島崎　相馬さん、そちらは？
相馬　あ、あ、彼は高村君です。光雲さんところの。
島崎　あぁ、
森　あぁ、何だ。
高村　高村です。
森　お噂はかねがね、
高村　いえ、とんでもない。
夏目　高村君は、パリにいたんじゃなかったの？
高村　数日前に戻ってきました。
夏目　あぁ、そう。

森　★それは楽しみですねえ、
夏目　★はい。
島崎　★えぇ。
石川　いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ
・・・
石川　それじゃあ、

＊石川、下手に退場。

佐藤　今のは、どういう気持ち？
田中　さぁ、
鈴木　まぁ、寂しいってことかな、
田山　えぇ。
鈴木　ね、
田山　はい。
高村　石川君は、私がアメリカに渡る前に一度、うちに遊びに来たんですが、
森　へー、
高村　私がロダンの話ばかりするもんで、世間知らずのお坊ちゃんはしょうがないと言って怒って帰って行きました。
森　ほー、
田山　あいつに言われる筋合いはないよね。
島崎　うん。
高村　まぁ、そうなんですが、
森　高村君は、歌は続けてるんですか？
高村　いえ、今は、やはり彫塑に集中したいと思っています。

森　そう。
高村　僕の前に道はない。
森　うん。
相馬　先生、陸軍はまだ白米ですか？
森　はい。
相馬　そろそろパン食はどうですかね？
森　いやぁ、百姓たちは、白米六合が食べられると聞いて、徴兵を渋々受け入れるんです。
相馬　じゃあ、せめて麦飯でも、
森　うーん、
田中　麦飯はまずいでしょう。
相馬　だから、今度海軍さんに、麦飯でもおいしいライスカリーを作ろうと思ってるんです。
田中　ほー、
相馬　船の中でも食べられる、とろみのあるやつを、
田中　なるほど、
鈴木　楽しみですね。
相馬　はい。
森　うるさい！
・・・
鈴木　え？
森　〇脚気は、脚気菌が原因である。
夏目　森さん、
森　非科学的な議論はやめてもらいたい。
夏目　いやいや、誰も脚気のことは言っていないし。
森　・・・失礼、
河東　あの、皆さん、じゃあ、そろそろ、
相馬　あぁ、えぇ。
野上　はい。
高村　はい。
野上　失礼します。
夏目　うん。
高村　▲僕のうしろに道はできる。

＊四人、上手に退場。

3・3・1

森　失礼しました。
夏目　いや、
森　大人げないところを見せてしまいました。
夏目　いやいや、
・・・
島崎　夏目先生は、満州に行くと伺いましたが？
夏目　えぇ、秋にでも、
島崎　あぁ、
夏目　寒くならないうちに、
島崎　えぇ、
夏目　奉天やハルビンで、長谷川君が何を見ていたのかを見てきます。
島崎　なるほど、
田山　朝鮮もですか？
夏目　うん、まぁね。
田山　はぁ、
夏目　朝鮮が外国のうちに見ておこうと思って、
田山　えぇ、
鈴木　あれ、伊藤公も満州に行くと聞きましたが、
夏目　えぇ、ハルビンでココツォフと会うらしいです。
田中　☆え、え、伊藤公は、枢密院の方に戻ったんじゃないの？

田山　☆ココツォフ、
鈴木　だから、また、最近、ロシアがうるさいですからね、
田中　えぇ、
森　まぁ、長谷川さんは、最後まで、そのことを心配なさってましたからね。
夏目　はい。
佐藤　★え、それは、もう一度、ロシアと戦争になるって事ですか？
森　はい。
佐藤　でも、もう勝ったのに、
鈴木　うん。
森　あれは勝ったとはいえないんです。
佐藤　え、だって、
森　国民は勝った勝ったと浮かれていますが、ただたんに、ロシアがいくさをやめてくれたに過ぎない。
佐藤　それは、でも、日本が勝って、ロシアがまいったって言ったんでしょう。
森　いや、どうしてやめてくれたのか、私たち軍人にも、よくわからんのです。
佐藤　そんな、
夏目　今度は、ロシアのうしろにアメリカもいますからね。
田山　えぇ。
鈴木　どうも、アメリカって好きになれないな、
田中　また、三国干渉ってことになったら、困るからね、
鈴木　うん、
佐藤　え、え、三国って今度はどこなんですか？
田中　いや、分からないけど、
夏目　そのためにも、朝鮮はやはり、併合しなくてはならないと、
森　まぁ、それが朝鮮の民衆のためでもあるでしょう。
夏目　えぇ。

＊下手から石川啄木登場。
３・３・２

石川　地図の上
朝鮮国にくろぐろと
墨を塗りつつ秋風を聴く
のは来年のこと。
島崎　やあ、
石川　どうも、
島崎　もう、終わったのだいたい？
石川　ハイ、一段落ですね。
島崎　ご苦労様でした。
石川　いえ、
一同　ご苦労様でした。
石川　先生、あの、
夏目　はい。
石川　二葉亭四迷全集の校正の件なんですけど、
夏目　うん。
石川　私にできるでしょうか？
夏目　それはもちろん、
石川　私には無理だと思います。
夏目　え、え、どうして？

石川　もう嘘をいはじと思ひき―
それは今朝―
今また一つ嘘をいへるかな

夏目　うん？
石川　謙遜しました。
夏目　うん。
石川　すみません。
夏目　いや、
石川　あ、あ、あ、それより夏目先生、
夏目　はい。

石川　あの、最近ちょっと、誤字脱字が多すぎませんか？

夏目　え？
石川　っていうか、なんだか誤字なのか、親父ギャグなのか分からない当て字とかやめて欲しいんですけど、

夏目　それは、まぁ、
石川　あ、あとあと、『それから』って題名はどうでしょう？

夏目　え？
石川　分かりにくいし、分かりにくいって言うか、何言ってるか全然わかんないし。

夏目　あぁ、
島崎　石川君、校閲係が題名にまで口を出すのは、ちょっと、

石川　え、だって、変じゃないですか？
島崎　いや、
石川　だいたい私、校閲係とかやりたかったわけじゃなくて、小説家になりたいんですよね。

島崎　それは知ってるけど、
石川　あとファッション雑誌とかにエッセイ書いたりとか。

佐藤　あぁ、『校閲ガール』か？
鈴木　え？
佐藤　地味にすごい『校閲ガール』
鈴木　あぁ、
田中　え、じゃあ、あれ、石原さとみ、
佐藤　まぁ、本人はそのつもりでしょうね。
田中　えぇ？
石川　うるさいな、
田中　あ、すいません。
鈴木　え、でもでも、石原さとみってシンゴジラに出てた人でしょ、

田中　あぁ、そうそう、
鈴木　あれ、本当のところはどうなの、あの英語は？

田中　あぁ、
鈴木　ねぇ、
佐藤　まぁ、あれは、イーオンが、ずいぶん金出したんじゃないの、映画に。

鈴木　でも、あれで、シンゴジラはアメリカ配給を逃したらしいよ。

田中　え、そうなの？
鈴木　噂だけどね。
田中　ふーん。
石川　シャラップ！
・・・

夏目　まぁ、何か、長谷川君のことで必要なものがあれば、うちに取りに来てください。

石川　☆ありがとうございます。

＊長谷川しず、長谷川りう、上手から登場。
続いて、与謝野晶子、北原白秋、若山牧水も登場。
それぞれ席に着く。
3・3・3

島崎　★あ、与謝野先生、
与謝野　どうも、
島崎　どうぞ、こちらに、
与謝野　☆失礼します。（座る）
田山　☆どうぞ、こっちこっち、
若山　すいません（座る）
北原　すいません。。
若山　失礼します。
北原　失礼します。
・・・
森　☆あぁ、奥さん、
りう　どうも、このたびは、
しず　★今日は、皆さん、どうもありがとうございます。
・・・
りう　えっと、
しず　本日は、皆様、ご多用にもかかわらず、亡き長男、二葉亭四迷こと長谷川辰之助のために、葬儀にご参列くださいまして誠にありがとうございます。
りう　ありがとうございます。えーと、私は／
しず　★ご承知の通り、辰之助は、ペテルブルグにて志半で病に倒れ、帰国の途上、ベンガル湾で客死いたしました。亡骸はシンガポールで荼毘に付さたと聞いております。
さぞや無念だったことと思いますが、本日、こうして、かくも多くの方々にご列席いただき、辰之助も、冥土より感謝いたしていると存じます。
りう　存じます。
しず　さて、石川さん、
石川　はい。
しず　全集の校正、よろしくお願いいたします。
石川　はい。
しず　石川さんのところも、たいてい、嫁姑の仲が悪いようですが、うちも、その点は、負けてはおりません。森先生の所も、大変なようですね。
森　はい、まぁ。
りう　お母様、
しず　しかし、これはどうでしょうか。明治の作家たちは、嫁姑の諍いをよく書き残していますが、それが世間よりも激しいというのは、要するに作家本人に責任があるのではないですか？・・・石川さん、
石川　はい。
しず　あんたが一番悪い。
石川　はい、ごもっともです。
しず　それでは、ささやかではございますが、どうぞ、今日は、辰之助の思い出話など、楽しく、お聞かせいただければと思います。
りう　思います。
しず　今日は本当にありがとうございました。

りう　ありがとうございました。
・・・
りう　（下手に向かって）あの、お酒を、もっと、
女中C　（袖から）はーい。
しず　りうさん、
りう　はい。
しず　お酒はいるだけで、
りう　はい。
しず　（夏目と森の前に座って酒をつぐ）どうぞ、
森　すみません。
しず　どうぞ、
夏目　☆すみません。
・・・
森　まぁ、ご家族、仲良く、
しず　無理ですね。
森　はぁ、
しず　だって、無理でしょう、森先生のところも、
森　えぇ、まぁ。
島崎　『半日』は拝読しました。
森　あぁ、
夏目　私も拝読しました。
森　いや、お恥ずかしい。
夏目　いよいよ森さんも、二刀流に磨きがかかってきましたね、
森　いや、どうでしょう。
しず　大谷選手も心配ですね。
森　はい。
しず　私はピッチャーに専念した方がいいと思っています。
森　はい、ごもっともです。

田山　あれ、でも、『半日』は、けっこう、僕のなんかよりエグかったですよねぇ、
森　まぁねぇ、もう開き直るしかないからね、
田山　はい。

＊島村抱月、永井荷風、高村光太郎、相馬黒光、上手から登場。
池辺三山、上手から登場。
3・3・4

森　☆島村さん、どうぞ、こちらに、
島村　はい。（森の隣に座る）
島崎　☆高村さんたちも、こちらに、
高村　はい。（座る）
永井　はい。（座る）
田山　☆相馬さん、ここ、ここ、
相馬　はい。
池辺　どうも、皆さん、本日は、
一同　（頭を下げる）
池辺　東京朝日新聞社主筆の池辺でございます。
一同　（頭を下げる）
池辺　社を代表いたしまして、一言、皆様に御礼申し上げます。
本日は、長谷川辰之助、二葉亭四迷の葬儀にかくも盛大にお集まりいただき感謝の念に堪えません。
島村抱月先生には、心のこもった弔辞をありがとうございました。

島村　いえ、
池辺　朝日新聞社は二〇〇一年、朝日舞台芸術賞を創設いたしました。第一回のグランプリは、野田秀樹作・演出『研ぎ辰のうたれ』でございました。しかしながら、二〇〇九年、収益環境の悪化から、コスト削減を理由に、第八回で休止となりました。八回でやめるくらいなら最初からやるなというご批判もあるかと思いますが、日露戦争以降、販売部数の低下が著しく、長谷川君亡きあと、ぜひ、夏目先生には、『虞美人草』に続いて『それから』もヒットさせていただきたい。
夏目　はい。
池辺　本日は、まことにありがとうございました。
一同　（頭を下げる）
池辺　それでは、私はいったん社の方に戻ります。
しず　ありがとうございます。
池辺　夏目さん、石川君、あとをよろしく、
夏目　はい。
石川　はい。
池辺　失礼いたします。
一同　（あまたを下げる）

＊池辺、下手に退場。

3・4・1

りう　（立って追いかける）
しず　りうさん、
りう　はい。
しず　見送らなくていいんです。
りう　え？
しず　葬式のときは、家族はお見送りはしないんです。
りう　はぁ、
しず　これだから田舎もんはねぇ、
森　はい、
しず　困ったもんですよ。
・・・
森　あ、あ、夏目さんは、永井君は？
夏目　え？
森　永井君です。
夏目　あぁ、
永井　永井です。
夏目　あぁ、いや、これは。
永井　★よろしくお願いいたします。
夏目　次々に若い才能が出てきますね。
森　はい。
島崎　あれ、永井さんと高村さんは？
高村　えぇ、フランスで、
島崎　☆おぉ、
田中　なんか、しゃれてるな。
鈴木　うん。
しず　☆りうさん、
りう　はい。
しず　お酒が足りません。
りう　はい・・・（袖に走って）すみません。
田山　島村先生、
島村　はい、

田山　島村先生が自然主義、自然主義って書くから、私に批判が集中して、

島村　いやあ、

田山　どうして？

島村　いや、申し訳ない。

夏目　文芸協会の方は、いよいよドラマに本腰を入れるようですね、

島村　はぁ、まぁ、

夏目　え？

島村　はい、まぁ頑張ります。

夏目　しかし、どうして旗揚げ公演がシェイクスピアなんですか？

島村　それはだから、坪内先生が、

夏目　やっぱり、

島村　はい。

島崎　自然主義の島村さんがシェイクスピアっていうのも変ですよね。

島村　まぁ、そういわないでくださいよ。

森　しかし、坪内さんは、遅いな、

夏目　えぇ、

島村　いや、それも、ちょっと私の責任かもしれません。

森　え？

島村　いや、お恥ずかしい話なのですが、うちの女優と私が、いま、その、

森　あぁ、

島村　はい。

森　それは、

島村　それを坪内先生が気に入らないらしくて、

森　☆うーん。

夏目　え、え、それでつむじ曲げて、

島村　はい。

佐藤　☆須磨子だ須磨子、

田中　え？

佐藤　松井須磨子、

田中　あぁ、

鈴木　女優はなぁ、

田中　うーん。

夏目　来ないの？

島村　えぇ。

夏目　長谷川君の葬式なのに。

島村　はい。

夏目　我が儘すぎるよ、

島村　はぁ、まぁ。

森　まぁまぁまぁ、

夏目　だって、

島村　私も本当は、森先生の翻訳でイプセンがやりたいです。

森　いや、えーと、

島村　小山内君がうらやましい。

森　いやいや、

島村　だいたい、自由劇場は森先生の翻訳にはふさわしくないでしょう。

森　はぁ、

島村　歌舞伎役者にリアリズムは無理でしょう。

夏目　いや、島村さん、

島村　歌舞伎は、糸吐いたり、空飛んだりしてればいいんです。

夏目　あの、ここは、いろんな人が来てますからね。
島村　自由劇場粉砕！
森　（ドラムの音に反応して上手を向く）え？

＊幸徳、管野、ドラムを鳴らしながら上手から登場。ＳＥＡＬＤｓのようなシュプレヒコールを繰り返す。

３・４・２

管野　桂やめろ！
幸徳　桂やめろ！
管野　桂やめろ！
幸徳　桂やめろ！
管野　山縣やめろ！
幸徳　山縣やめろ！
管野　山縣やめろ！
幸徳　山縣やめろ！
管野　無政府共産！
幸徳　無政府共産！
管野　無政府共産！
幸徳　無政府共産！
管野　天皇粉砕！
幸徳　天皇粉砕！
管野　天皇粉砕！
幸徳　天皇粉砕！
管野　桂やめろ！
幸徳　桂やめろ！
管野　桂やめろ！
幸徳　桂やめろ！
管野　ありがとうございました。

幸徳　・・・
しず　どうも、本日はご愁傷様でございました。
幸徳　どうも、わざわざお忙しいところを、
しず　それでは、これで失礼させていただきます。
りう　ありがとうございました。
管野　ありがとうございました。
森　森先生、
管野　はい。
森　私たちは、これからも弾圧されますか？
管野　はい、おそらく、
森　なぜですか？
管野　なぜというと、
森　私たちは、赤旗を振って無政府共産と叫んだ
管野　だけです。
森　えぇ、
管野　それが、何ヶ月も牢屋に入れられるほどの罪ですか？
森　政府は、そう考えていますね。
管野　どうして？
森　どうしてでしょう。
管野　私たちは思想を持って、それを言葉にしただけです。考えたら罪ですか。言葉にしたら罪ですか？
森　うーん。
夏目　それは、ここにいる私たちみんなのせいなんだ。
管野　え？
夏目　私も含めて、みんなのせいなんだ。
管野　どういう意味ですか？

夏目　私たちはこの二十年、どうすれば内面というものを言葉にできるかを考えてきました。長谷川さんは、もっとも早く、それには「自由な散文」が必要だと気がついた。北村君は、それを見つけることができずに苦悩した。

島崎　はい。

夏目　長谷川君の発見した新しい日本語で、国木田君は『武蔵野』を書いた。私たちは、世界を描写できる言葉を獲得した。同じころ、正岡君は病床の六畳間から宇宙を描写した。そして、そこで得た言葉を使って島崎君と田山君は、それぞれの方法で内面による真実の告白を書くに至った。

管野　それがどうして？

夏目　「見たまえ、そこに片眼の犬がうずくまっている」

管野　『武蔵野』の一節ですね？

夏目　私たちは、風景を描写するだけで、その描写する主体の内面を伝えることができるようになりました。

管野　はい。

夏目　そして、それに多くの人が共感する。

管野　はい。

夏目　ならば当然、政府は、『猫』と書いた人を牢屋に入れ、『犬』と叫んだ者をむち打つでしょう。

管野　そんな、

夏目　だって、政府は、その言葉が、内面の何を表しているのか不安でたまらないから。

・・・　私たちは国民国家を作るために、新しい日本語を育てた。しかし、これからは、言葉は日本国にあだなすものとなるでしょう。国家もまた、言葉を敵とするでしょう。

・・・　でも、日本にも、デモクラシーがだんだんに広まって、少しずつ、よくなっていくんじゃないですか？

相馬　滅びるね。

夏目　・・・

幸徳　幸徳さん、

夏目　はい。

幸徳　幸徳さんはたしか、土佐・中村の生まれでしたね。

夏目　はい。

幸徳　中村より東京は広い。

夏目　えぇ、東京より日本は広い、日本より・・・あたまの中のほうが広いでしょう・・・政府は、その広さを怖がっている。

幸徳　はい。

夏目　どうか、くれぐれもお体を大切に。

幸徳　はい。

森　ごきげんよう。

幸徳　ありがとうございます。（管野に）行こうか？

管野　はい。

＊幸徳、管野、下手に退場。
3・4・3
・・・
石川　われは知る、テロリストの
かなしき心を――
言葉とおこなひとを分ちがたき
ただひとつの心を、
奪はれたる言葉のかはりに
おこなひをもて語らむとする心を
＊石川、下手に走って退場。
与謝野　石川さん、
若山　白鳥は悲しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ
＊若山牧水も、走って、下手に退場。
与謝野　え？
北原　○からたちの花が咲いたよ　白い白い花が咲いたよ
＊北原白秋も走って下手に退場。
森　最後の北原君のは、何？
島村　さぁ、
夏目　ちょっと、違うね。
森　はい。
島村　あれ、夏目さん、ひげは、
夏目　あ、あ、あ、（外していたひげをつける）
・・・
田中　まぁ、じゃあ、僕たちも帰りますかね。
鈴木　そうだね、
佐藤　うん。
島崎　え、え？
田中　それじゃあ、ま、
島崎　あぁ、はい。
高村　じゃあ、僕も、
島崎　☆え、え、高村君、来たばっかりじゃない、
高村　☆☆えぇ、まぁ、でも、
相馬　☆じゃ、私も、
島村　はい。
与謝野　☆☆じゃあ、私たちもそろそろ、
島崎　え、そうですか？
与謝野　うん、まぁ。
永井　そうですね。
田山　え、永井君も？
永井　はい。
田山　えぇ、もうちょっとなんか話そうよ。
永井　☆☆え、なんかって？
田山　だって、俺たち、なんか気が合いそうじゃない？
永井　・・・そうですか？
田山　うん、きっと
永井　あわないと思います。
田山　え、え？
永井　行きましょう。

与謝野　ええ、

＊田中、佐藤、鈴木、高村、永井、与謝野、相馬、
続けて退場。
次々に挨拶をしていく。

森　☆☆☆じゃあ、私たちも、
夏目　ええ。
島村　じゃあ、私も。
森　ええ、
りう　そうですか？
夏目　はい、私はまだ胃の具合が、
りう　あぁ、お大事になさってください。
夏目　ありがとう。
島村　森先生、今度は是非、文芸協会で、
森　いやいや、だって、坪内さんがいるでしょう。
島村　だって、あの人、めちゃくちゃなんだもん。
森　そんな、
夏目　行きましょうか？
森　はい。
一同　ありがとうございました。
森　こんど、陸軍のいい医者紹介しますよ。
夏目　はい。
森　胃潰瘍も、胃潰瘍菌が原因です。
夏目　え、そうなんですか？
森　▲はい、間違いありません。
島村　ほー、

＊夏目、森、島村、下手に退場。

りう　お母様、そろそろ片付けを、
しず　そうね、
りう　はい。
しず　じゃ、これ下げてもらって、
りう　はい。
しず　私はちょっと、向こうで。
りう　はぁ、
しず　それじゃあ、
島崎　はぁ、
しず　田山さん、
田山　はい。
しず　お友達を大切にね。
田山　はい。

＊しず、上手に退場。
りう、下手にお膳を持って退場。

田山、与謝野の座布団に突っ伏す。
島崎、廊下までみんなを見送って、障子を開く。
３・４・４

島崎　あれさぁ、いよいよ脚気の新薬ができるらしいよ。
田山　へー、なんて薬？
島崎　オリザニン、
田山　変な名前。
島崎　駒場の農学校で研究してるんだって、
田山　誰が？
島崎　鈴木梅太郎。
田山　変な名前。

島崎　うん。
・・・
島崎　僕たちがやってきたことは、意味のないことだったんだろうか？
田山　うん。
島崎　僕は、『破戒』を書き上げたとき、「北村さん、勝利だよ、勝利だよ」って心の中でつぶやいた。
田山　うん。僕たちはたしかに勝った。
島崎　うん。
田山　旧世代に勝利して、いまから、僕たちの時代が始まるんだと思った。
島崎　うん。
田山　でも、ラスボスは、全然、違うところにいた。
島崎　そうだね。

＊田山、再び、座布団に突っ伏す。

四場　夏目漱石の死

一九一六年（大正五年）一二月
夏目漱石の葬儀の夜

＊上手から臨済宗の読経の声が聞こえる。
照明もかすかに変わる。
島崎と田山、居住まいを正して座る。
島崎はCの3に、田山はBの3に座っている。
そこに、上手から次々と人が入ってくる。
4・1・1
森鴎外、永井荷風、高村光太郎、上手から登場。
みな、それぞれ、席に着く。

田山　どうも、ご苦労様です。
森　☆うん。
島崎　☆永井君、こっちに、
永井　はい。
島崎　高村君も、
高村　☆☆はい。
島崎　ご結婚、おめでとうございます。
高村　あぁ、ありがとうございます。
永井　おめでとうございます。
高村　ありがとうございます。
島崎　今日は、奥さんは？
高村　あ、今日は、ちょっと用事で。

島崎　☆☆☆あ、そう。

田山　☆☆ごぶさたいたしております。

森　いえ、こちらこそ、

田山　ますます、ご活躍で、

森　いやいやいや、

森　☆☆☆おめでとう。

高村　ありがとうございます。

田山　めでたい、めでたい。

＊北原白秋、相馬黒光、野上弥生子、平塚雷鳥、上手から登場。

島崎　あぁ、北原君、

北原　はい。

島崎　こっちこっち、

北原　☆はい。

相馬　☆先生、ごぶさたしてます。

森　うん。

相馬　平塚さんは、ご存じですか？

森　☆☆えぇ、もちろん、

平塚　ごぶさたいたしております。

森　ごぶさたです。

田山　中村屋は大人気ですね。

相馬　ありがとうございます。

田山　僕はねぇ、あの、クリームワッフルっていうのが好きでね。

相馬　あぁ、

田山　何個でも食べられる。

相馬　☆☆ありがとうございます。

野上　☆☆あれ、今日は、智恵子さんは？

高村　今日は、ちょっと、用事で、

野上　☆☆あぁ、切り絵の？

高村　え、まぁ、それも、

野上　あぁ、

永井　☆☆☆島崎先生も、また、何か長い小説を、

島崎　いや僕のは、長いだけで、

永井　いえ、そんな、

＊島村抱月、与謝野晶子、若山牧水、上手から登場。

4・1・2

森　☆☆あぁ、島村さん、こちらに、

島村　☆☆☆ありがとうございます。

北原　☆☆☆あぁ、与謝野先生、ごぶさたいたしております。

与謝野　うん。

島崎　ごぶさたいたしております。

与謝野　☆えぇ、

島崎　ま、ま、ま、ま、（酒をつぐ）

与謝野　どうも、

島崎　若山君もこっち来て、

若山　ありがとうございます。

与謝野　☆こっち、こっち、

若山　はい。
永井　ま、ま、ま、
若山　海哀し山またかなし酔ひ痴れし恋のひとみに
　　あめつちもなし
周りの人　おぉ、

相馬　☆☆芸術座は、大変な評判ですね。
島村　いえ、そんな、
相馬　チケットもとれなくて、
島村　いえ、言ってくだされば、それは、
相馬　ありがとうございます。
田山　♪カチューシャかわいや
相馬　（加わる）わかれのつらさ
一同　（徐々に加わる）せめて淡雪　とけぬ間と
　　神に願いを（ララ）かけましょうか
　　☆カチューシャかわいや　わかれのつらさ
　　今宵ひと夜に　降る雪の
　　☆☆あすは野山の（ララ）路かくせ
　　カチューシャかわいや　わかれのつらさ
　　せめて又逢う　それまでは
　　同じ姿で（ララ）いてたもれ

田山　☆（北原に）空に真っ赤な雲の色
　　（高村に）東京には空がない
　　どっちやねん。
　　（与謝野に）その子二十歳、くしに流るる黒
　　髪の、おごりの春の美しきかな。
　　先生、いまもお美しいですけどね、

＊歌の途中から、芥川、川端、志賀、森田、下手から登場。
胸には、それぞれの名前が書かれた布（７センチ×２０センチくらい）が安全ピンで留められている。
以下、舞台上の登場人物も、ゆっくりとポケットから布を取り出して、自分の名札を胸につける。
４・１・３

森　☆☆あぁ、どうも、芥川君。
芥川　はい。
森　今日は、本当にご苦労様でした。
芥川　こちらこそ、皆さんにお手伝いいただいて？
島崎　志賀君も、川端君も、まぁ座って、
志賀　ありがとうございます。
川端　☆☆☆ありがとうございます。

与謝野　☆☆☆じゃあ、森田さんは、こっちに、
森田　はい。
　　・・・

＊歌が終わって、

森　受付の方は、もう？
芥川　はい、どうにか、落ち着きました。
島崎　森田君も、ご苦労さん、
森田　いえいえ、
　　・・・
田山　あれ、あの、これ、僕が突っ込む役回りなんで聞きますけど、

平塚　はい。
田山　森田君とは、特に、その後は、
平塚　（平手打ち）
田山　痛って、
平塚　失礼、
森田　すいません。
森　　まぁ、今日は夏目君の葬儀の席だから、
森田　はい、
平塚　はい。
森　　みなさん、ここは、
一同　はい。

＊夏目鏡子、上手から登場。
4・1・4

鏡子　どうも、
一同　（頭を下げる）
・・・
鏡子　本日は、皆様、ご多用にもかかわらず、亡き夫、漱石夏目金之助のために、葬儀にご参列くださいまして誠にありがとうございます。特に、森先生、島村先生など、坪内先生はまだのようですが、主人が生前より尊敬申し上げていた先生方においでいただきましたこと、亡き主人に代わり、御礼申し上げます。
森　　いえ、
島村　とんでもない。
鏡子　また、芥川君、森田君など木曜会の皆さんには葬儀をお手伝いいただき、ありがとうございました。
芥川　いえ、
森田　恐縮です。
鏡子　さて、夏目漱石の妻といえば、これまで悪妻の代名詞のようなひどい扱われ方でしたが、ＮＨＫで尾野真千子さんが演じてくださったものが、たいそう好評で、私の名誉回復が図られた次第でございます。どうもありがとうございました。
一同　（頭を下げる）
鏡子　今日は、ささやかではございますが、どうぞ、夏目の思い出話などを、お聞かせいただければと思います。
今日は本当にありがとうございました。

＊伊藤野枝、下手から走りながら登場。
4・2・1

伊藤　★やべー、やべやべやべ、、
島崎　え？
野上　あれ、伊藤さん？
伊藤　あぁ、野上さん、
野上　え？
伊藤　あぁ、平塚さん、
平塚　どうも、
伊藤　あの、どうも、このたびは、平塚さんから受け継いだ『青鞜』が廃刊のやむなきに至ってしまいました。
平塚　えぇ、
伊藤　本当に、申し訳ございません。
平塚　いえ、

与謝野　伊藤さん、
伊藤　あ、与謝野先生、
与謝野　大杉さんは？
伊藤　あの、本人はすごく来たがってたんですけど、
与謝野　えぇ、
伊藤　傷口が、全然塞がらなくて、
与謝野　あら、
野上　そんなに？
伊藤　もうぱっくり、
田山　しっかし神近さんも、むちゃくちゃするよねぇ、
・・・
田山　すんません。
伊藤　奥様でいらしゃいますね、
鏡子　はい。
伊藤　このたびはご愁傷様でございました。
鏡子　はい。
伊藤　じゃあ、先にお参りを、
鏡子　ありがとうございます。
伊藤　失礼します。
鏡子　はい。

＊伊藤、上手に退場。

4・2・2

野上　・・・
結局、大杉さんは野枝さんと暮らすんですよね？
相馬　まぁね、
野上　ひでぇなぁ、
平塚　神近さん、しばらく刑務所だろうしねぇ、
野上　はい。
与謝野　え、え、じゃあ、前の奥さんは？
相馬　別れたみたい、さすがに。
与謝野　あ、そう。
野上　だから、男子は、
相馬　うん。
平塚　でも、それで生活が苦しくなっちゃって、
与謝野　あぁ、
野上　だって、大杉さん、神近さんに食べさせてもらってたんでしょう。
相馬　まぁね、
野上　ひでぇなぁ、
平塚　都合よすぎだろう、
相馬　ひものくせに、
与謝野　何が自由恋愛だよ、ったく、
・・・
与謝野　田山さん、
田山　はい？
与謝野　おまえが言うなって顔してますね。
田山　え？
与謝野　ね？
田山　いえいえ、滅相もない。
与謝野　・・・
田山　本当に、（小さな声で）島崎、島崎・・・、
・・・
田山　すいませんでした（土下座）
森　島村さんのところも、いろいろと、
島村　えぇ、まぁ。
森　ねぇ、

島村　いや、その話は、ここでは。
森　え、そうですか？
島村　怖い人が、いろいろいらっしゃるんで、
森　あぁ、
島村　（みんなをみて）いえいえいえ、僕は、そんな・・・すみませんでした（土下座）。
島崎　（下手からの声に）え？

＊宮沢賢治、下手からマイクとスケートボードを持って登場。
腰にはスピーカーをつけて、そこからラップミュージックが流れてくる。
4・2・3

宮沢　△♪どっどど、どどーど、どーどど、どどー
どっどど、どどーど、どーどど、どどー
青いくるみを吹き飛ばすぜー
酸っぱいカリンも吹き飛ばせよー、
どっどど、どどーど、どーどど、どどー
世界が全体
花袋は変態
日本は温帯
今夜は熱帯
幸せに、幸せに、
ならないと、ならないと
☆個人の幸福
民権回復
ラップは反復
一陽来復
世界が全体幸福にならなければ、個人の幸福

森　はあり得なーい
宮沢　イエーイ、
あの、君は？
♪明暗、それから、門、坊ちゃん、
夏目漱石死んじゃった。
やまなし、オッペル、雨ニモマケズ
宮沢賢治がやってきた
イエーイ、
・・・
宮沢賢治です。
森　えぇ。
宮沢　皆さん、こんにちは、
一同　こんにちは、
森　君は、ずいぶん若く見えますが、
宮沢　今年で二十歳です。
森　そう。
宮沢　岩手から来ました。
森　あぁ、以前にも、君みたいな人がいましたよ。
宮沢　石川先輩ですね。
森　えぇ、
宮沢　でも、僕は、あんなに生意気ではありません。
森　そうかな。
宮沢　はい。
森　だといいけど、
宮沢　僕はこれから、皆さんが思いもよらなかったような小説や詩を書きます。
森　うん。
宮沢　でも、その価値が、皆さんに分かるのは、僕が死んだずっと後です。
森　○うん。

宮沢　高村君、よろしくね。
高村　はい。
若山　あの、さっきのは？
宮沢　え？
若山　さっきのは歌ですか？
宮沢　日本語は基本的に子音と母音の単純な羅列なので、韻を踏むのに限界がありますね。
若山　えぇ、
宮沢　まだまだ、研究の余地があると思います。
若山　うん。
宮沢　若山さん、
若山　はい。
宮沢　（若山を指さす）
若山　え？
宮沢　（ラップで）♪いざゆかん、
若山　いざゆかん、
宮沢　ゆきてまだみぬ山をみん、
その寂しさに、
その悲しさに、
その喜びに、
その切なさに、
君はたうるや！
若山　ありがとう。
・・・
森　まぁ、座ったら。
宮沢　え？
森　どうぞ、
宮沢　☆はい。（座る）
若山　☆その寂しさに、
森　ゆっくりしていくといい。

宮沢　はい。ありがとうございます。
森　うん。ま、ま、いっぱい。
宮沢　あ、僕、お酒飲まないんで、
森田　あ、そう。

＊坪内逍遙、下手から登場。
４・２・４

島崎　あぁ、
坪内　すいません、どうも。
島崎　坪内先生、
坪内　うん。
宮沢　おっせーよ、
坪内　ごめーん。
宮沢　ごめんじゃないよ、
坪内　だって、
宮沢　あんたのせいで、みんながこんなに苦労してんだよ。
坪内　分かってるよ。
宮沢　本当かよ、
坪内　ってか、この人誰？
田山　いや、あの、いいです、放っといて、
宮沢　☆なにを！
坪内　☆あ、そう。
田山　あんまりいろいろ言うと、また、すぐ歌い出しちゃうんで、
宮沢　うたわねぇよ、
坪内　★へー、啄木君みたいだね、
田山　あれとも、ちょっと違うんですけど、
宮沢　全然違うよ。

森　まぁまぁ、坪内さん、
坪内　はい。
森　こちらに、
坪内　はい・・・夏目さんが亡くなられて、皆さん沈痛の極みかと存じます。
一同　（頭を下げる）
坪内　どうも、奥様、このたびは、
鏡子　いえ、ご列席いただき、ありがとうございます。
坪内　まぁ、私も夏目さんからは、『ハムレット』の翻訳上演を巡って、大変手厳しい批評をいただいたこともありました。
鏡子　えっと、
坪内　公演を断念するか、忠実な翻訳者としての立場を断念せよとまで言われました。
鏡子　申し訳ありません。
坪内　いえ、それは、その通りだったと思います。
鏡子　そんな、
坪内　まぁ、皆さん、そんなわけで、日本文学は、いろいろありますが・・・でも、ま、みんな元気出していこう！
坪内　・・・がんばろう！
・・・
坪内　え、だめ？
島崎　ま、いいっすけど、
田山　はーい。
一同　はーい。
坪内　うん。ガンバロウ！
一同　はい。

森　ま、ま、坪内さん、
坪内　はい。（座る）
森田　頑張ろうって言われてもなぁ、
高村　うん。
北原　ま、ま、ま、
島崎　まぁ、頑張るしかないよ。
志賀　はい。
永井　でも、そういう根性論はどうですかね、
与謝野　そういうこと言わないの、
永井　すいません。
志賀　まぁ、何を頑張るかってことですよ。
若山　いや、そういう君の上から目線がね。
北原　カラタチの花が咲いたよ、
島村　☆申し訳ありませんでした。（坪内に向かって土下座する）
坪内　あぁ、
島村　文芸協会はすべて坪内先生の資金に頼り、また解散後の借財の後始末もお願いし、いや、そもそも私が洋行できましたのも先生のご推挙があったればこそでしたが、
坪内　ま、ま、そう大げさに言わないで、
島村　申し訳ありません。
坪内　ま、いろいろあるよ、人生は。
島村　すみません。
坪内　ね、
森　はい。
坪内　ご成功、何よりです。
島村　ありがとうございます。

＊坂口安吾、織田作之助、太宰治、走って下手から登場。
4・3・1

坂口　安吾でーす、
太宰　治でーす。
織田　織田作之助でございます。
（両側の二人にはたかれる）
いてっ、
島崎　それ、たぶん、あんまり元ネタが分からないと思う。
坂口　え、え、じゃあ、
三人　♪うちら陽気な無頼派トリオ、
誰が言ったか知らないが、
男三人揃ったら、デカダンスとは愉快だね
島崎　もっとわかんないと思う。
三人　えー、
島崎　えーじゃないよ、
森　君たちは？
三人　はい。
森　ずいぶん、若く見えますが？
三人　はい。
森　おいくつですか？
坂口　十歳です。
太宰　七歳です。
織田　三歳だブー、
森　今日は、どちらから？
坂口　新潟です。
太宰　津軽です。
織田　大阪だブー。
森　おー、
坂口　僕たちは、皆さんが焼け野原にしてしまった日本で、これから、新しい文学を作るんです。
森　そう。
織田　志賀さん、
志賀　はい。
織田　あんた、何年か前に山手線にはねられましたね。
志賀　はい。
太宰　それで、関西の方の温泉に行って、蜂の死骸を見つけましたね。
志賀　はい。
坂口　あと、イモリ殺したでしょう。
志賀　はい、すいません。
織田　あなたは、来年、そんな、どうでもいいことを小説に書いて、神様になります。
志賀　やりぃ、
太宰　芥川さん、
芥川　はい。
太宰　漠然とした不安とか言って死んでんじゃねぇよ、
芥川　え、え？
太宰　☆正岡さんとか見習えよ。
芥川　はぁ、
坂口　おまえに言われる筋合いないよ。
太宰　すいません。
＊伊藤、上手から戻ってくる。
織田　伊藤さん、

坂口　（止める）
織田　え？
坂口　ダメダメ、
三人　（頭を下げる）
太宰　ま、ま、どうぞ、
伊藤　はい。
太宰　お体に気をつけて、
伊藤　はい。（座る）
坂口　甘粕に気をつけて、
伊藤　はい。
織田　相馬さん、
相馬　はい。
織田　中村屋のライスカリーもおいしいですが、千日前の自由軒も負けてませんよ。
相馬　はぁ、
太宰　与謝野さんと平塚さん、
二人　はい。
太宰　お二人は、このあと、待機児童問題について、すっごい喧嘩します。
二人　はぁ、
織田　まぁ、お二人とも仲良く、
二人　はい。
坂口　北原さんや高村さん、
二人　はい。
坂口　あなたたちは、もう少し長生きをして、戦争を賛美する、とても醜い詩を書きます。
高村　まじ？
坂口　はい。
田山　あーあ、
北原　すんません。
高村　すんません。
島崎　ひでえな、
坂口　島崎さん、
島村　はいはい。
坂口　あなたはそれを、見て見ぬふりをします。
一同　あちゃー、
島崎　すんません。
永井　ひでえな、
坂口　永井さん、
永井　はい。
坂口　あなたは戦争が終わってから、実は俺は反対してたんだけどねーみたいな日記を発表して、儲けます。
一同　あちゃー、
野上　おまえが一番ひでえな、
永井　すんません。
太宰　川端さん、
川端　はい、すいません。
太宰　あなたは、もっと、とっても長生きをして、とってもすごい賞をとります。
一同　おー、
川端　ありがとう。
坂口　大江君も頑張ったね、
織田　頑張った、頑張った、
太宰　村上は？
坂口　どーかなー、
織田　とりあえず、今年はないんでしょ、
太宰　ないんだって、
坂口　適当だなー、あれも。
太宰　うん。

森　じゃあ、日本は、夏目さんが言った通りに、滅びたんですね？
坂口　はい。
鏡子　さっすが、
芥川　はい。
森　でも、文学は生き残った。
坂口　はい。
宮沢　日本語も？
織田　はい。
森　うん。よかった・・・よかった。
島村　えぇ。
太宰　大衆が文学を読むようになり、毎年のようにベストセラーが生まれ、作家は長者番付の常連になります。
一同　おー、
田山　やったー、
坂口　二十世紀の終わりまでは、
森　え？
織田　やがて、小説はだんだんと読まれなくなります。
森　どうして？
太宰　まぁ、他に面白いものが、いろいろありますからねぇ、
坂口　って言うか、小説とかってめんどくさくねぇ、
太宰　うん。
織田　とりあえず、小説は携帯で読まれるようになります。
坂口　恋空だ。
太宰　あったねー、
織田　それから、小説はネットで読まれるようになります。
坂口　小説投稿サイト「小説家になろう」には、現在、五十万件以上の作品が掲載されています。登録者数は百二十万人。
島崎　え、てことは？
坂口　はい、登録者が一人で十作品読んだとしても、一つの作品の平均読者は二四人だけということになります。
島崎　そんな、
坂口　小説は誰でも書けて、誰も読まないものになりました。
森　うん。
太宰　でも、大丈夫です！
森　え？
太宰　やがて、機械が小説を書くようになります。
森　ほー、
太宰　過去の、皆さんの優れた名作をすべてデータとして蓄積して、ついに最強の小説が生まれます。人々はこぞって、その小説を読みました。とにかく最強に面白かったからです。
森　なるほど、
田山　すげーな、
島崎　うん。
坂口　そして、人々は、二度と小説を読まなくなりました。
森　え？
坂口　だって、最強の小説を読んでしまったから。
森　〇あぁ、そうか。
島崎　なるほど、

田山　残念。
織田　でも、大丈夫です！
森　え、え？
織田　やがて、機械が小説を読むようになりました。
森　なに？
織田　機械は小説を書くだけではなく、読むようになりました。
森　でも、それは？
織田　最初は、図形や複雑な数式のようなものだったようです。
森　うん、
織田　しかしやがて、そこから、究極の小説が生まれます。
森　うん。
・・・
織田　宮沢さん、
宮沢　はい。
織田　あなたは科学にお詳しいですね。
宮沢　はい、一応、盛岡高等農学校に在籍していますので。
織田　今年、一九一六年にアインシュタイン博士が一般相対性理論を発表します。
宮沢　はい。
織田　そして、もう少しすると、ハイゼンベルクという学者が、「不確定性原理」を発表します。
宮沢　電子の位置を測定するために光を当てると、電子自体がその影響を受けてしまって正確な位置を測定できない。
織田　そうです。
宮沢　それが、なにか？

織田　機械が書いた究極の小説は、その不確定な電子の動きを、明晰に描写するものでした。
・・・
織田　機械の読者たちは、それを読んで深く深く感動しました・・・
坂口　僕たちに、決められたことなんて何もない。
太宰　僕たち、すべての物質は、なんて自由なんだろう。そして、私たち存在は、なんて、不条理なんだろう。
・・・
坂口　数億年の沈黙が続きました。
やがて、かつて機械たちが宇宙船で植民したどこかの惑星で・・・銀河系の片隅で・・・
また、一人の北村透谷が生まれます。一人の正岡子規が生まれます。
・・・
島崎　（田山を振り返って）田山君、
田山　なに？
島崎　泣いてるの？
田山　違うよ。
島崎　そう？
田山　泣いてるように見えるけど、嘘泣きだよ。
島崎　あ、そう。
・・・
＊高橋源一郎、スマホのついた自撮り棒を持って、下手から登場。
４・３・２
高橋　すいません・

・・・

高橋　すいません、高橋ですが。

森　はい。

高橋　ちょっと、これから皆さんについての小説を書くんで、資料用に、自撮りしていいですか？

森　はい。

高橋　すいません、じゃあ、お邪魔して、こっちから、

＊高橋、舞台上手前方に立って、写真を撮る。

高橋　お願いしまーす。

一同　はーい。

高橋　えっと、じゃあ、こっちからも（下手前方に立つ）・・・あぁ、じゃあ、あの「ぶんがくー」でお願いします。

一同　はーい。

高橋　せーの、

一同　ぶんがくー

高橋　ありがとうございました。

一同　いえいえ、

＊上手から音楽がかかり、みな、その方を向く。

やがて舞台全体が音楽で覆われる。

みんな、狂ったように踊り出す。

やがて、踊りをやめて、客席に向かって一礼。

了